
Please,please,please come back !

工藤 円

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Please · please · please come bac

k !

【ZINE】

N1601F

【作者名】

工藤
円

【あらすじ】

絶世の美女、栗藤つむぎに想いを寄せる槇原太陽。しかし高校入
学以来の大恋愛（片想い）の終焉はあっけなく訪れて……？片想い
のあの子には一度と出会えない、槇原太陽の不思議な恋愛物語。第
一部連載中。

序章「百年の純真」

風になびく艶やかな黒髪、豊潤な唇に細い脚。

白く澄んだ肌の上に乗った整えられた顔のパーツは、道行く人の目を惹きとめる。

容姿端麗頭脳明晰、大和撫子とは正に彼女の為にある言葉だ。俺は彼女に会い、心からそう思つた。

八月、北海道。自転車に跨り風を受けて走る高校生達を横目に、俺はバスの中で読書に励んでいる。

真夏の太陽光線が肌を焼くこの時期、バスを利用する高校生はない。自分を除くと高校生は三人しかいないバスの車内を眺めながら、俺は思った。

俺がこうしてわざわざ金を払つてバスを利用する理由は一つ。このバスを彼女も利用するからだ。不運な事に俺と彼女はクラスが違い（この事は俺独自の不運イベントランキング歴代一位にランクインしている）、この一年半会話した事すら無い。密に想いを寄せる少年Aにとって、同じ空間を共有できるこの時間はとても大切なものなのだ。

そんな事を考えながら漫画雑誌のページを捲つていると、そろそろいつものバス停が近づいてくる。そう、彼女がバスに乗り込んでくるのだ。俺は雑誌を鞄の中にしまい込み、ネクタイを締め直した。入り口を眺めるのに最も適した右斜め後方の席、そこが俺の特等席。俺はポケットから携帯音楽プレイヤーを取り出し、その停止ボタンを押した。

バス停が見えてくると、俺はあくまでも平常心を装い目を瞑る。車体は次第にスピードを緩め、バス停の前で停止する はずだ。どうしたのだろうか。なかなかスピードを緩める気配を見せない。俺はそわそわしながらも、しかし目は開けなかつた。

頭の中であれこれと自問自答している間にもバスは進む。これはいくらなんでもおかしい。俺は痺れを切らし口を開いた。

バスは、とっくにいつものバス停を通り過ぎていた。

「え？」

平然と走り続ける車内から後ろを振り返ると、誰もいないバス停が目に入った。

第0話「百年の純真 (the boy can't meet her forever)」

栗藤さんがバスに姿を見せないようになつてから一週間。結局、彼女はその間一度も学校に来ていなかった。

学年内では彼女が学校を辞めたとか不登校になつたとか入院してるとか、様々な噂が飛び交っていた。俺は「今日こそはもしかしたら」と毎日思いながら、バスでの上下校を繰り返している。

どうしても、彼女が学校からいなくなるだなんて信じられなかつた。

俺は彼女の顔写真の類を一切持っていない。頭の中にのみ存在する彼女に想いを寄せながら、ただただバス代一百三十円を支払い続ける。

彼女が学校に姿を見せないようになつてから三週間が経つた。どうやら彼女のクラスメイト達すら、彼女の欠席について何も知らないらしい。俺は諦めそうになるのを何度も堪えながら、未だバスに乗り続けていた。

丁度朝の八時を過ぎた頃、いつものバス停に近づいても俺はもう漫画雑誌を鞄の中にしまう事は無い。視線を窓の外に向ける事すら無く、淡々と雑誌のページを捲る。

運転手がいつもの停車駅の名を読み上げたが、誰一人降車ボタンを押す事は無い。誰も降りず、誰も乗らず。バスは悠然といつものバス停を通り過ぎる。

はずだ。バスは次第にスピードを緩め、そしていつものバス停の前で止まつた。俺はゆつくりと、首を入り口へと向ける。

豊潤な唇。肩ほどまで伸びた艶やかな黒髪。

それは確かに、俺が散々待ち望んだ見覚えのある顔だつた。スカートの裾から見える肉付きの良い脚。背負つた鞄が食い込む肩。そして、確実に一回りも大きくなつた白い顔。

三週間ぶりに見かけた彼女は、なんか知らない間にバスになつていた。

間の抜けた俺の声が、人の少ないバスの車内に響き渡つた。

第1話「愛の条件」

「だつ、誰だお前は……」と指を差して罵倒したい気持ちを必死に抑える。

あの細い脚、か弱い背中、整った顔が……

肉付きの良い脚、がっちらりとした背中、ふくよかな顔……しかし

それでいて、確實に面影のある顔。

俺は完全に放心し、ぐつたりと頭を下げる。

（バ、バカな……こんな事が……）

耳に入つてくる栗藤さんの笑い声が、やけに他人事のようだった。

第1話「愛の条件 (basis of love)」

「栗藤さんがブスになつた?」

友人の葉山が、驚いた顔をして俺の言葉を繰り返した。

「何言つてんだ。あの栗藤さんがブスになる訳ねーだろ」

葉山は呆れた様に俺の言葉を聞き流す。

「ほ、本当なんだつて……お前一回見てみろつて」

「あーはいはい。その内な。てか栗藤さん最近学校休んでんじゃねーのかよ」

そう言つて葉山は教室の外を眺める。その時、計つた様に丁度栗藤さんが教室の前を横切つた。

「！－！ なつ……あれ、今の栗藤さん－？」

「だから言つたるーが……」

「俺はうなだれ、机に突つ伏した。

（ぐ、ぐそ……。なんでこんな事に……）

この珍事は即座に学年、学校中に知れ渡つた。ファンの多かつた

彼女の変貌ぶりに驚いた人間は多く、男子は皆栗藤さんの変貌を嘆いた。

「あ～あ。じゃあもうこの学年は高嶺さんがダントツだな」

葉山は両手を頭の後ろで組みながら言った。

高嶺美華。たかみねみか 学年一の美女と言われていた栗藤さんに次ぐ美女で、清楚な栗藤さんに対して長いまつ毛に程よく化粧の乗った肌。他人を嘲笑うかの様な鋭い瞳は正に女王様のそれであつた。

（ちづーんだよ……俺が栗藤さんの事を好きでいたのは、顔だけじゃなくて……、もつと……）

涙が出そうになつた。それを葉山には悟られたくない、俺は顔を隠した。

高校入学以来、一年半に及ぶ大恋愛（片想い）のあつけない幕切れを感じた。

放課後、俺は葉山たちと暫く教室に残つてから帰路につく。こんな事、以前は殆ど無かつた。栗藤さんは常に授業が終わつた後すぐのバスに乗る為、俺もそれに乗るようにしていたのだ。

（でも……もういいんだ。栗藤さんはもう……）

俺は校門前のバス停で十分程バスを待ち、そして乗り込んだ。中には誰もいない。俺はいつもの席ではなく、一番後ろの窓際に座つた。

バスに乗っている時間はとても退屈だつた。この一年半、この時間をおれほど持て余した事は無い。俺は鞄の中から読みかけの漫画雑誌を取り出し、それを膝の上で開いた。

十五分程経つた後、信号の所でバスが停止した。開いた窓の隙間から女性の甲高い笑い声が聞こえてきて、俺は窓の外に目をやつた。（うわっ……すっげー美人）

二十代半ばであろうか。露出度の高い服装、大人の魅力を醸し出

す脣。気付けば俺は、すっかり見入ってしまっていた。

(やっぱ女性ってのは何より美人じゃねーとな。性格よりもまずは顔、これが鉄則)

俺は変わり果てた栗藤さんの顔を頭の中に思い浮かべ、そしてすぐそこをかき消した。

(ソフトクリーム……食べてえな)

女性が右手に持つソフトクリームを眺めながらそう思った。

信号が青に変わる。バスは女性を追い越してしまい、俺は後ろを振り返る。

女性は笑いながら、手に持っていたソフトクリームのカップを道路に放り投げた。その瞬間、その女性に入ってしまった自分がアホらしくなった。

(…………、マジかよ。いくら美人でもお前みたいな奴は願い下げだ)

俺は前を向き直し、再び膝元の漫画雑誌に目を落とした。
(やっぱ、顔だけ良くて駄目なんだよなあ。顔も良くて性格も良い……、そんなの、栗藤さんしかありえねーよ…………)

今度は昔の栗藤さんの顔を思い浮かべ、暫くそれに想いを寄せる。
(やべ、泣く……)

俺は手元の漫画雑誌の内容に意識を寄せた。気を紛らわせないと冗談抜きに泣いてしまった。

少しして信号が再び赤を示し、バスは少し揺れた後停止した。

再び窓の外に目をやると、ソフトクリームを舐めながら歩く栗藤さんの姿が目に映った。

(！－栗藤さん……！)

一瞬胸がときめいた気がしたが、それは気のせいだ。もう彼女を見ても胸をときめかせる事は無い。

(あ、そういうこいつものバス停の辺りか……。塾かな？ つかソフトクリームなんか食つてんじゃねーよ。痩せろよ)

俺は呆れて視線を逸らしそうとしたが、三週間前までの俺ならこん

なチャンスを逃すはずが無い。どうにも勿体無いような気がして、結局視線を逸らす事は出来なかつた。

その時、栗藤さんは丁度ソフトクリームを舐め終えた。ゴミ箱を探しているのだろうか？ 辺りをキョロキョロと見回している。しかし辺りにその様なものは無く、俺は栗藤さんがどうするのか眺めていた。

栗藤さんは一、二度辺りを見回した後、そのソフトクリームのカップを鞄の中にしまい込んだ。

胸の鼓動が、波を打つ。

漏れ出す笑みは、どこから来るものか分からぬ。
俺は漫画雑誌を鞄にしまい込み、満足気に田を覗つた。

第一話「愛の条件」（後書き）

もう少しで世に出ていた変換ミス
(でも……もういいんだ。栗富士山はもう……)

第2話「男達は誰が為に動く」

「ぱっかじやねーの?」

葉山の一言が俺を貫いた。

「な~にが『ソフトクリームのカップを持ち帰った』だよ。お前バカじやねーのか」

「つるせーよ。今時そんな女子高生いねーぞー」

俺が言葉に熱を帯びさせてそつ葉山に言つと、葉山は呆れた様に頭を搔いた。

「まあ……栗藤さんが性格良いつてのは分かったよ。そこはそういう事にしといてやる。で、何? まさかお前それであの栗藤さんの事を好きにでもなる訳?」

葉山は淡々と言葉を連ねた。

「いやまあ……それはまた別の話で……」

俺は言葉を濁らせる。それを見て葉山は笑つた。

「悪い悪い。でも俺はお前が高嶺さんを狙うなら応援するぜ。お前、高嶺さんの事も美人だつてずつと言つてたじやん」

俺は、正直高嶺さんの事を相当可憐じと思っている。栗藤さんさえいなければ、そもそも俺は高嶺さんの事を好きでいたかもしれない。

「まあ……考えとくよ」

俺はそう言って机に顔を伏せた。

第2話「男達は誰が為に動く（For whom does the man move?）」

翌朝。未だバスで通い続いている俺は栗藤さんの会話に耳を傾け

ていた。

「つむつむ、そのキー ホルダー変わってるね」

”つむつむ”改め栗藤つむぎ。栗藤さんが美人であつた頃はそのあだ名も狂おしいほど愛らしいものであつたが、今ではそれも不愉快なだけだ。

「これ？」

栗藤さんは肩にかけたスクールバッグについたキー ホルダーを指差した。糸の様なもので練り込まれた洋風の人形は、満面の笑みを浮かべていた。

「このキー ホルダー、お爺ちゃんの形見なんだ」

「あっ、……そうなんだ」

栗藤さんの友人は目を伏せた。それを見て、栗藤さんは微笑んだ。
「つうん、いいの。このキー ホルダーは私が四歳の時に家族で海外旅行に行つた時、お爺ちゃんが買つてくれたんだ。一個」

「一個？」と思わず声に出そうになつたのを俺は抑え込む。

「私、旅行中にこれと同じものをお爺ちゃんに買つてもらつたのにすぐ失くしちやつたんだ。それに気が付いたのはもう飛行機に乗る直前で、もう一度買いに戻る事も出来なくて私は空港でわんわん泣いちゃつてたらしいの」

俺は、黙つてその話を聞いていた。

「飛行機も今更キャンセル出来ないし売店にも売つてないし、私は益々大泣きしてその場に座り込んじゃつたらしいんだ」

栗藤さんは、少し恥ずかしそうに笑つた。

「そんな私を見かねて、お爺ちゃんだけがそこに残つてもう一度同じキー ホルダーを買い、一人次の便で帰つてくる事になつたの。今思えばそんなの考えられないけど、その時の私はそれで納得してたらしいんだ」

ここに栗藤さんは少し間を置いた。

「……日本に帰つてきた時、お母さんは飛行機事故のニュースを見て泣いてた」

一瞬、空気が固まつた気がした。

俺はすぐに我に返り、栗藤さんの気持ちを考えてみた。

そうしたら、涙が頬を伝つた。

「つむぎ……」

栗藤さんの友人は言葉を失つていた。俺は、自分がこの会話に参加していない事を幸運に思つた。俺が会話に参加していたとしても、栗藤さんに何と声を掛ければ良いか分からなかつただろう。

俺はただ黙つて前を向き、バスが学校に着くのを待つた。

＊＊＊

厚い雲のかかつた、薄暗い放課後。俺はいつものバス停でバスを待つていた。

今日は体育委員の関係で帰るのが遅くなり、バス停には俺と栗藤さんとその友人の三人だけが立つていた。俺は少し離れた位置にいたため栗藤さんの会話を窺う事は出来なかつたが、何となく栗藤さんの方を眺めていた。

俺は、右肩に物をかけない。昔野球部でピッチャーをしていた頃の名残か、今でもその習性が残つている。その為、栗藤さんの右肩にかかる鞄が目に入つたのは偶然ではなく、そして朝はその鞄についていた箸のキー ホルダーが今は無い事に気が付いた。

(…………)

つけたり外したりしているのだろうか。そのキー ホルダーについてあれこれ考えていると、頬を一滴の水が伝つた。

俺は瞬間的に朝の涙を思い出し咄嗟に頬に手をやつたが、もう一滴額に水が落ちたのを感じて冷静さを取り戻した。

(雨か…………)

俺が今立っているバス停の傍には、一箇所だけ雨を防ぐ事の出来

る屋根がある。しかし栗藤さん達がすぐにその下に入ってしまった為、俺は近くの古本屋で読書に耽る事にした。

約一時間後、俺は漫画を棚に戻す。十五分で戻る予定が、漫画が面白すぎたのでついつい予定の四倍の時間を過ごしてしまった。こんな事も、以前は絶対に無かつた。栗藤さんと同じバスに乗る事を何より優先していたからだ。

俺は店の出口へ進み、中から外を眺めた。

(うわっ……雨すげえ……)

雨はあの後更に激しさを増し、既に傘無しでは外を歩けない状態になっていた。しかし俺は最低でもバス停までは傘無しで移動しなければならない。鞄を頭の上に掲げ、雨の中を駆け抜けた。

歩道に溜まった水溜りを何度も足で鳴らしながら先程の屋根の下に着く。当然ながら、もう栗藤さんはそこにいない。俺は鞄を足元に置き、鞄の中からタオルを取り出し頭を拭いた。

少し走り抜けただけでこれだ。俺は屋根の存在に感謝しながらバスを待つ。

三分後、バスはすぐにやつてきた。俺が屋根の下を出ると入り口が開き、俺は急いで中に入り込んだ。雨だからか、中は混んでいる。俺は左右を見渡し空いている席を見定めた。

運転手の後ろの席が空いている。俺は前方に歩き出した。

途中で何と無く外を眺めると、どしゃ降りの雨の中を歩き回る栗藤さんの姿が目に入った。

栗藤さんは体勢を低くしたりキヨロキヨロと周囲を見回したり、何かを探している。

先程の、キー ホルダーについていなかつた栗藤さんの鞄を思い出した。

俺は馬鹿だ。なんでこんな事に気が付かなかつたのだろう。鞄に出した。

キー ホルダーがついていたのは、ただ単に失くしていたからだったのだ。

俺はバスを飛び出し、どしゃ降りの雨の中に体を放り込んだ。降り頻る雨を防ぐ事も無く、俺はただ栗藤さんの元を目指して走り抜けた。

視界の悪くなつた雨の中で、膝をつき地面を見回す栗藤さんの後ろに俺は立つた。栗藤さんの友人はいない。キー ホルダーの事を言わず、ただ「先に帰つて」と友人をバスに乗らせた栗藤さんの姿が目に浮かぶ。この雨の中、友人をキー ホルダー探しに付き合せる様な事はない。栗藤つむぎとは、そういう人間だ。

どれ程の時間をこの雨の中で過ごしていったのだろう。風呂に入つた後の様な髪、黒く変色しているかの様なブレザーを見ても、俺には「もう止める」とは言えない。後ろに立つ俺に気付く事無くただキー ホルダーを探し続ける栗藤さんを見て、気付けば俺は走り出していた。

校内にあるならば、誰かが拾つているだろ?。そもそも、栗藤さんが校舎内はもう探し終えているはずだ。……いや、そんな理屈じゃない。女子がこの大雨の中傘も差さずに探し続けているというのに、俺だけ雨の無い校舎内を探せるだろうか。

俺は校門からバス停に続く道を、ただひたすら探し続けた。排水溝付近、ガードレール、花壇の中、あらゆる場所を探す。しかし、栗藤さんは遭わない様にしながら校門からバス停までの道を何往復しても、キー ホルダーは見つからない。半ば諦めそうになつたその時、校舎のすぐ傍にある公園が目に映つた。

別に、感謝が欲しい訳じやない(以前の栗藤さんならまだしも)。何の為にこんな事をしているのか分からぬ。でも、何故か見捨てられない。

俺は公園の芝生の中で、泥だらけになつたキー ホルダーを見つけた。

「…………！？！？」

俺が後ろから栗藤さんの肩を叩くと彼女は驚いてこちらを振り向き、そして俺の姿を見てもう一度驚いた。この大雨で、俺が今どん姿になつているのか自分でも分からない。でもそんな事は、とりあえずどうでも良い。とにかく、一秒でも早く彼女にキー ホルダーを見せてあげたい。その一心で、俺はキー ホルダーを持った右手を差し出した。

「…………え、これ、どうして…………！？」

栗藤さんはそれを見て目を丸くした。俺は黙つて右手を突き出す。

「これ、探してくれたの…………？」

栗藤さんは俺の右手から恐る恐るキー ホルダーを受け取り、そう尋ねた。俺は黙つたまま一度頷いた。

「嘘…………あ、ありがとう…………！」

それが雨なのか涙なのかは、彼女本人にしか分からない。栗藤さんの頬を水滴が伝つた。俺は急激に恥ずかしくなり、鞄の中からタオルを取り出しそれを彼女に投げつけた。

「えつ…………、これ、使っていいの？」

俺は頷く。

「あ、ありがとう」

栗藤さんはそう言つとそれで頭を拭きだした。俺はそれが終わるのを待つ事無く、その場から走り去ろうとした。

「えつ…………、ちょっと、どこ行くの…………！？」このタオル…………

俺は彼女を振り返り、右手を振り、「要らない」という意思表示をした。

「いや…………あの、まだ…………」

俺は一度と振り返る事無く、その場から全力で逃げ去つた。

(あああ～…………、絶対変人だと思われた…………！…)

翌朝、バスの中で俺は昨日の事を振り返っていた。

(突然現れて無言で去るんだもんな~……、つーか栗藤さんからしたらお前誰だよって感じだろ。何の大雨ん中必死になつてキー ルダー探してあげてるんだよ。キモイツつーの！ あの泥だらけのキー ホルダーも捨てちまつたかもな~)

考えれば考える程後悔が深まり、俺は頭をかきむしめた。

そういうしている内にバスはいつものバス停で止まる。俺は焦つてイヤホンを付け、栗藤さんが俺に話しかけてこない様に寝た振りをした。

(来るな~……来るな~……)

俺が必死で念じていると、どうやら栗藤さんは前方の席に座つた様だ。

安心して薄っすらと目を開くと栗藤さんは右肩に鞄をかけていて、変わらず満面の笑みを浮かべる泥だらけの人形が目に入った。

第3話「避難警報」

(無理！ 無理！ 無理無理無理！－！)

朝のバスの中、俺は追い詰められていた。

恐らく、今栗藤さんはこちらを向き昨日のタオルを返すチャンスを窺っているだろう。

(無理無理無理！ 話しかけられたらパニック確実！－！)

という事の顛末で、俺はひたすら寝た振りを続けていた。

第3話「避難警報 (the boy possibly . . .)」

八時二十分。後およそ五分程で学校へ到着する。それまで決してこの両目は開いてはならない。起きている事を気付かれようものなら、栗藤さんに話しかけられてしまう。

(男だ太陽！ 寝ろ！ 無心になれ！)

とは言え、栗藤さんが本当に俺にタオルを返そうとしているのか気になり薄つすら目を開くと、体を捻りこちらを向いている彼女の姿が目に入った。

(うおっ！ やばっ、今日合ったかも！－！)

俺は即座に目を閉じ、再び無心に返る。

そんな事を繰り返していると、運転手が学校前のバス停の名を読み上げた。

(どつ……どうすんの！？ バス降りる時話しかけられたら逃げ場がねえ……！－！)

俺は、冷や汗が頬を伝うのを感じていた。

(バス降りる時まで寝た振りしてるとかねーし……、いや、寝過ごした振りして次のバス停で降りよう！ よし、これでいこう！

これしかない！）

俺は寝過ごした振り作戦の決行を決め、バスが学校前のバス停で止まつても尚且を開かなかつた。

運転手がいつもの定型文を読み上げ、扉が開く。バスの前方から人が降り中央部から人が乗り込み、人の乗り降りが終了し、そして扉が閉じる。

（あ……、危なかつた……）

俺は大きく息を吐き、目を開いた。

先程の体勢のまま、前方の席からこちらを向いている栗藤さんと目が合つた。

（…………）

俺は、ゆっくりと瞼を閉じた。

（降りろよーー！）

心の中で一旦ツッコミを入れておく。

（ま、まさか栗藤さんまで残つてるとは……。俺にタオルを返す為？ そうだよな、やつぱり……）

鼓動が激しさを増す。掌がしつとりと湿り、恐らくではあるが顔が紅潮しているのを感じていた。

バスはすぐに次のバス停へと到着する。俺は腹を括り、ポケットから携帯を取り出し右耳のイヤホンを外した。

「もしもし？」

寒い。寒すぎる。しかし四の五の言つてはいられず、俺は電話を掛けている振りを続けた。

電話をしていれば栗藤さんは話しかけられないだろう。俺は首を傾げ肩と耳の間に携帯を挟み、空いた両手で財布から一百二十円を取り出した。それを淡々と機械に通し、バスを降りる。

降りた所には栗藤さんがいたが、俺はそれに気付かない振りをして学校へ向かった。

その日、俺はほとんど教室から出なかつた。廊下で栗藤さんと遭遇するのを避ける為だ。

栗藤さんは悪いと思つたが、本当に何も話せる気がしない。栗藤さんと話すというのがこれだけ緊張する事だとは、一人遠くから眺めていただけの頃には知る由も無かつた。……と言つか、今の不細工になつた栗藤さんの事など何とも思つていらない筈なのに、何故緊張するのだらう。

(…………)

俺は、それ以上考えるのをやめた。

放課後。もしかしたら栗藤さんは今日最初のバスに遅れるかもしれない。俺は帰りのSHRが終わると同時に教室を飛び出した。万一、栗藤さんに話し掛けられても耳にイヤホンを付けていれば「気付かなかつた」で通る。俺は両耳のイヤホンに頬もしさを覚えながら校門を通り抜けた。

案の定、栗藤さんはバス停にいた。

(……、栗藤さん、すまん！ そのタオルはあげますから！)

俺は栗藤さんに気付かれる前に方向転換し、いつもの古本屋へ向かつた。

俺はどうしてこんなに情けないのだろう。少し前まで好きだつた女性に対して、言葉を交わす事も出来ない。古本屋で漫画を読んでいると栗藤さんにに対する申し訳無さは益々募り、俺は自分で自分が嫌になつてきた。

(……こんなんじや、栗藤さんも俺なんか嫌だらうな～。いや、今はもう俺も栗藤さん嫌だけど)

既に四時半を回つている。古本屋に来てから三十分。俺は一度漫画を棚に戻したが、またすぐにそれを取り出す。

(……一応、後三十分ここにこいつら……)

朝の事が頭をよぎつていた。

結局、それから更に一時間後。俺は漫画を棚に戻し、古本屋を出てバス停へと向かった。

(流石にもういないう�うな……)

帰宅部は既に帰宅し、部活に入っている奴は部活。この時間バスを利用する生徒は稀だ。俺は安心してバス停に着いた。

見覚えのあるタオルを膝に置き、ベンチで佇む女性の背中が目に入った。

その女性は両足をブラブラと前後させながら、ただひたすら何かを待つている。

「…………」

俺は観念し、両耳のイヤホンを外した。

第3話「避難警報」（後書き）

困ったこと

サブタイトルを考えるのに10分とかかかる」と

第4話「f r a g i l e」

「何？　お前そんな事してたの？」

葉山は驚いた様に目を丸くする。

「あ、ああ……」

俺は、葉山にだけは昨日今日の出来事を話していた。雨の中栗藤さんのキー ホルダーを探した事、タオルを借した事、そして昨日初めて彼女と言葉を交わした事。

「俺の知らねー間にそんな事しやがって」「いや、別にただ、流れで……」

葉山は俺の顔を一瞥した後顔を寄せた。

「お前……じゃあもしかして、栗藤さんの事……」

当然、その先は聞かなくても分かる。ただ俺はその返答に困り、時間を稼ぐ様に葉山が全てを言い終えるのを待っていた。

「好きなのか？」

「…………」

三秒ほど沈黙が流れる。

「…………別に」「…………」

少し、顔が赤くなつていたかもしない。俺はそれを葉山に気付かれたかどうかだけが気になつていた。

「本当かよ？　お前、本当は栗藤さんの事好きなんじゃねーの？」

「多分、気付かれてない。」

「いや、無いつて……。どんなに性格良くても、外見があれじやあな……」

「それ言つたらそつだけど」

葉山も納得した様に頷いた。

そうだ、栗藤さんはとてもなく良い人だ。限り無く善人だ。でも、不細工だ。ならば俺は栗藤さんの事を好きな筈は無い。

俺は自分に言い聞かせる様に、それと同じ様な意味の話を葉山に

話した。

第4話「f r a g o i l e」

「お、おい檜原！ 高嶺さん！」

葉山は教室の入り口から俺を手招いた。

「マジ？」

俺は椅子から立ち上がり葉山の元へ駆け足で詰め寄る。

「うわっ……美人……」

率直な感想だ。端整な顔立ち、綺麗な瞳。決して大きく顔を崩さない笑みは見る者を魅了する。

俺と葉山は高嶺さんが通り過ぎたのを見届けてから自分の席に戻った。

「…………」

栗藤さんの顔を思い浮かべると、心の底から溜息が出た。

「お前……、失礼すぎるだろ」

「だつてさあ……」

「まあ気持ちは分かるが……。お前、本当に栗藤さんの事好きだもんな……」

何気ない一文だが、俺はその違和感を聞き逃さなかつた。

「……過去形にしろ」

「何？ お前今日放課後ヒマなの？」

帰りのSHR終了後、俺は葉山に声を掛けた。

「毎日ヒマだつづーの。ただ今まで栗藤さんと同じバスに乗りたかつたから遊ばなかつただけだ」

「……、もう良いのか？」

「だから良いつてば。今日はカラオケでもいーぜ」「お、いいねえ！」

葉山のテンションが上がるのが見るために分かつた。

「楳原とカラオケなんていつ振りだ？」

「……たまに行くだる。土日祝日だけど」

そう。俺はもう栗藤さんと同じバスに乗る必要は無い。と言
うか、もうバス通学する必要が無いな。

「んじゃ、行こうぜ」

学校の近くにある、歩いて行けるカラオケ。

(良い……んだよな)

俺は胸にもやもやとした物を抱えつつ、葉山の後について行く。

「あ。そう言えば俺今日朝の星座占いで運勢最悪だった

葉山は唐突にそんな事を言い出した。

「……て事は、俺もか」

別にそんな物を信じる性分では無いが、こう言わると少しは気
になる。と言つても、後はもうカラオケに寄つて帰るだけだ。俺は
葉山の話を適当に聞き流していた。

「ああ……楳原」

「なんだ？」

「お前、栗藤さんの事好きだろ」

「好きじゃねーって」

「本当か？」

「……本当だよ」

葉山は不満気に俺の顔を見た。

「もし、栗藤さんに好きな人がいたらどうすの?」

。 。 。

何故だろう。それは少し嫌かもしれない。

「……。嫌なんだな?」

「別に……。俺は、高校に入學して以来一年半、ずっと栗藤さ

んの事が好きだつたんだ。そりやあ、少しは嫌な気分にもなる。それだけさ」

葉山と話している様で、俺は自分の脳内に向かつて話しかけていた。

「別に今はもう、好きでもなんともねーよ。メチャクチャ良い人だとは思うけどな。あ、だから友達にはなつてみてーな。それ以上どういひつとは思わねーよ」

「…………」

「」の答えに葉山が満足していないであろう事は分かつていた。しかし葉山はそれ以上何も言わず、ただ黙っていた。

(……そう、栗藤さんはただ物凄く性格の良い人。それだけだ。もう恋愛感情は無い……)

俺は気付けば唇を噛み締めていた。すぐ我に返り口を開いたが、唇には微かに痺れが残った。

右手で唇を触れようとした。それと同時に、少し遅いか。同じ学校の制服を着た男と一人で歩く、栗藤さんの姿を視界に捉えた。栗藤さんは笑いながら男の背中を叩く。その笑顔は、俺が今まで見た事の無いものだつた。

全ての思考回路が止まる。視界がぼやけ、頬が強張る。

唇の痺れなど、既に頭から消えていた。真っ白な頭の中で、丸い顔の栗藤さんだけが笑っていた。

「嘘」

左肩の鞄がずり落ちた。

第5話「森川大和」

栗藤さんが、男と一人で歩いている。心の奥底ではこの事から導き出される答えにじつへに辿り着いていながら、俺はそれを何度も否定した。

「おい檍原、大丈夫」

「悪い」

俺は葉山の言葉を遮った。

「……今日、帰つていいか」

「…………」

葉山は黙り込んでしまった。俺は鞄を肩に掛け直し、いつものバス停に向かった。

第5話「森川大和」

翌朝、俺は自転車に跨っていた。バスで栗藤さんと顔を合わせるのが嫌だつたし、そもそも今はもうバスで通う理由が無いのだ。俺は片道三十分かかる通学路を、一二十分程で走り抜けた。

教室に入ると葉山が俺の元へとやつってきた。

「葉山。昨日は悪かつた」

「……いや、心中お察しするよ」

葉山は口元に笑みを浮かべながらそう言つた。

心中。俺は一体、今何を感じているのだろうか。一年半好きでいた女性に彼氏がいた事への喪失感？ 今はもう好きでも何でもないのに、一年半好きでいたという事実が今も栗藤さんを特別視させてしている？

いや……もしかしたら、俺は今でも……。

(いや、それは無い。それだけは絶対に無い)

「…………」

しかし、それ以外に胸から湧き上がるこの感情を説明する言葉が浮かばなかつた。

「お前、昨日栗藤さんの隣にいた奴が誰か知ってるか?」

俺は首を横に振つた。帰宅部である俺は、基本的に他クラスの生徒について疎い。

「だよな。俺も直接話した事がある訳じゃないんだけど、たまに話題に挙がるんだ」

と言つことは、この学年ではそこそこ有名人なのだろうか? 俺は黙つて葉山の話を聞いた。

「一年八組、森川大和。昨日見た通りのイケメンの上に運動神経抜群、性格も優しいって評判だ」

……有名になる理由も分かる。そんな奴が恋敵じゃ、そもそも俺の出る幕は無かつたか……。

「つつても森川が栗藤さんと付き合つてるなんて話、聞いた事無かつたけどな」

当然だ。この俺が昨日まで知らなかつたんだから。

「もしかしたら、別に付き合つてる訳じやねーかもよ?」

恐らく、俺を励ます意味でそう言つてゐるのだろう。俺はそれを十二分に感じていた。

「ああ……。俺が直接確かめる」「マジ?」

葉山は顔をしかめた。

「…………どつち?」

「…………森川の方。栗藤さんに直接聞くなんて絶対無理」

「…………。まあ、同学年の男子に聞く内容としては別に不自然でも無いが

「無いが?」

「もし森川が栗藤さんと付き合つても、手は出すなよ

「出やねーよ」

恐らく、昨日の放課後葉山といた時以来。自然と笑みが零れた。

帰りのSHR終了後、俺は葉山とアイコンタクトだけ交わした後、即座に教室を出た。

俺達前半クラスの生徒が利用する階段の反対側、東階段の所に森川はいた。そいつは右肩に鞄を背負い、一人階段を降りていく。

「森川！」

一階と一階とを繋ぐ踊り場、気付けば俺は森川の名を叫んでいた。
「…………。何？」

俺の方を振り返った森川は怪訝そうな顔をしていて、一瞬俺はた

じろいだ。

「い、いや、「めん」

俺と森川は正面から向き合つた。その顔は見れば見る程、（昔の）栗藤さんに相応しい。

（ああ……。やっぱり、俺なんかが敵う相手じゃねえ……）

俺は思わず黙り込んでしまっていた。

「おい、何だよ？」

「あつ、わ、悪い」

「…………」

森川は目を細め、明らかに嫌そうな顔をしている。俺はとにかく本題に入る事を決意した。

「あ、あのさ……、森川、もしかして栗藤さんと付き合つてる?」
聞いた。聞いてしまった。その答えが返ってくるのが恐くて、俺は目を逸らした。

「…………」

好きじゃない。俺は栗藤さんの事は好きじゃない。でも、違うと言つてくれ……！

森川から俺の顔が見えない様に俺は頭を下げる、ひたすら祈るよう

に田を瞑つた。

一年でも一年でも、死ぬまで掃除当番代わつたつて良い……。毎日昼飯おいりても良いし、やれつて言つなら裸で校内一周もする……。

だからお願ひだ 違うつて言つてくれ…………！
どれ位経つただろうか。永遠の様に永く感じられた数秒後、森川は氣だるそうに口を開いた。

「何……？ お前知つてんの？」

体中の体温が引いていき、顔が青褪めるのが分かつた。

俺は下げた頭を上げる気力も無く、今にもその場に倒れ込みそうになるのを必死に堪える。

(ああ……、そつか。やっぱり、こいつが栗藤さんの彼氏なのか……)

こいつが栗藤さんと付き合つていた一年半、俺はただ眺めるだけしか出来なかつた。俺はそれが悔しくて、情けなくて、気付けば大粒の涙が頬を伝つていた。

「…………。おい？」

森川の声で俺は我に返り、焦つてワイシャツの袖で涙を拭いた。

「…………お前、もしかしてつむぎの事好きなのかな……？」

つむぎ。栗藤さんの事を平然と下の名で呼ぶ森川の事が、憎らしくも羨ましかつた。

「い、いや、別にそんなんじゃなくつて、ただ気になつたつて言つつか……」

田の前で涙を流しておいて、この言い訳は何だろ。でももう今は何も考えられなくて、頭に浮かんだ言葉をただひたすら並べた。

「…………。良いぜ、好きにしなよ。どうせ俺はもうつむぎとは別れる」

こいつが今何を言つているのかまったく分からぬのに、不思議と涙は枯れていった。

「え……？ ビ、ビ「うごう事？」

俺はワイシャツの袖で目元を隠したまま話した。どうせ、泣いていた事はバレている。でもせめて泣き顔は見られたくない。

「言葉通りの意味だよ。俺がそろそろつむぎを振る」

こいつが栗藤さんと付き合っていると聞いた時以上に、体の芯が冷たくなる。

「な……、なんで？」

「あ？　お前も見りや分かるだろ。なんか知らね一間に勝手にデブりやがつて。もうあいつの事は好きでも何でもねーよ」

葉山の言葉が無ければ、俺はこいつの事を殴り飛ばしていたかもしれない。拳に力が入った瞬間、葉山の一言が俺を冷静にさせた。

ただ、俺が森川に飛び掛ろうとするのを止めたのはそれだけでは無かつた。ある一つの考えが、俺の中にはあった。

（俺は……）

膝の上に両拳を置き、それに力を込めた。

（俺は　こいつと同じかもしない……………）

栗藤さんの事を顔だけで判断し、ちょっと太ったからと言つてそれを批判し、好きだつた感情が冷めていく。

俺に、森川を責める資格など無かつた。

膝の上の拳に更に力が入り、頭が下がる。それを見た森川は黙つてその場を去つた。

俺は涙を拭きながら、校門を飛び出した。まだバスに間に合ひかもしけない。

どうしても、栗藤さんに聞きたい事がある。

全速力でバス停までの道を駆け抜けると、ベンチに佇む栗藤さんの背中が目にに入った。

「あれっ？　榎原くん？」

俺の足音に反応し、後ろを振り返った栗藤さんと目が合つた。俺

は栗藤さんの正面に回り込む。

「どうしたの？」

学年中の男子が驚愕した丸い顔。頬や顎には肉が付き、しかし確かに、栗藤さんだという事を俺に分からせる瞳。

「あ、あの……栗藤さん、今、付き合ってる人、いるよね……？」途切れ途切れになりながら、必死に言葉を繋げる。それを聞いた栗藤さんは顔を赤くした。

「えつ……？　えつ？　なんで？」

「昨日……、森川って奴と歩いてるの見たから…………」

栗藤さんは驚いた様に目を丸くしていた。しかし俺が言葉を言い終えると、照れくさそうに笑った。

「えへへつ……、見られちゃったか」

その笑顔は今の俺にはあまりに重過ぎて、暫く頬が痺れた。
でも……それでもビ�しても、栗藤さんの口から直接聞きたい事がある。

「……栗藤さんは、も、森川の事、好き…………？」

それを聞き、栗藤さんはもう一度驚いた様な表情を見せた。しかし彼女はすぐに笑みを浮かべ、嬉しそうに目を細めた。

「うん、大好きだよ……！」

言つた後で栗藤さんは恥ずかしそうに口をつむぎ、可憐らしく下を向いた。

それ以降、どんな会話を交わしたか覚えていない。ただすぐにバスが来て、俺は用事があるからと栗藤さんを見送った。

誰もいないバス停のベンチで、俺は顔を両膝に埋めた。

第6話「ひと恋めぐつ

森川と言葉を交わした翌週の月曜日。俺は完全に放心していた。

「槇原……。やつぱ、栗藤さん付き合つてた？」

「……ああ

俺は力無い返事を返した。

「あ～、そんなに落ち込むなつてば！」

葉山は俺の両肩を掴み、前後に大きく振った。

別に、それだけで落ち込んでる訳じゃねえよ……。言わねえけど。

「とにかく、今はもう体育祭に集中しようぜ？ な？」

体育祭。俺の通う高校では三日間に渡り大々的に行われるイベントで、毎年その時期が近づいてくるとクラスはそれ一色となる。「槇原、お前は今年もソフトボールで出るんだろ？ 経験者だし。他の奴らは練習しに行ってるぞ」

……とてもじゃないが、気分になれない。

「悪い……。今はそんな気分じゃねえよ」

俺は席を立ち上がり、教室の扉に手を掛けた。

「ソフトボール、森川も出るんだぞ！」

扉に掛けた、右手が止まる。

「…………。だから何だ。そんなんで一矢報いたって、今更何にもならぬーよ」

俺は扉を開き、教室を出た。

第6話「ひと恋めぐつ」

カキン！

渡り廊下の窓から、心地の良い金属音が聞こえる。

(そもそも、経験者の俺が素人相手に勝つたって何にもなんねーだろ？……)

窓の外に目をやると、クラスの連中がキャッチボールをしているのが目に入った。

(下手だな…………。まあ、未経験者ならこんなもんか)

視線を戻すと、正面から歩いてくる栗藤さんと目が合った。

気付けば俺は目を逸らしていて、栗藤さんは少し戸惑っていた。視界の端で栗藤さんは友達と喋っていて、俺は一度と顔を上げる事なく彼女とすれ違った。

「…………」

悔しい。

今、彼女と言葉すら交わせないのが例えよつも無く悔しい。

悔しさと情けなさに右手を震わせていると、何だか広い世界に一人置き去りにされている様な気がして、俺は逃げるよつにすぐ傍の男子トイレに入った。

「何？ お前栗藤と別れんの？」

中に入ると二人の男子の会話が聞こえてきて、俺は陰からそれに耳を傾けた。

「あたりめーだバカ。お前も見ただろ」

「あ、ああ……。まあそりゃそうだけど、お前栗藤の事好きだったんじやねーの？」

「美人だつた頃はな。もつあいつに用はねえよ」

「…………」

「あ～あ、しかしあいつと別れた後はどうすつかな。高嶺とでも付き合つか」

「おい！ 高嶺さんは俺が狙つてんだ、お前邪魔すんじゃねーよー。」

俺は、ただただ黙つて聞いていた。

やりよつの無い怒りは俺の体内を駆け巡り、微かな涙として体外に出た。

「あ～ああ、本田もお勤め！」苦労さんでしたつと」

帰りのSHRが終わると、葉山は背筋を大きく伸ばした。

「中年かよ」

「ひるせーな。つーか、ソフトの連中は放課後練習してくらしきけど、お前はどうすんの？」

「いや……俺は帰るよ」

「そつか」

葉山はそう言つて小さく笑い、俺の背中を叩いた。

「あ、でもお前知ってる？ 森川って小学校の頃ソフトボールのチームでピッチャーやつてたらしくて、かなり本格的らしいよ」

「…………。だから？」

「いや、言つてみただけ」

そう言つて葉山は微笑んだ。

「…………」

(森川が…………)

その時、クラスメイトの一人が話しながら教室に入ってきた。

「いや～、栗藤さんマジで変わりすぎだろ、あれ」

「ほんと何があつたんだって感じ。あ～、俺栗藤さんの事好きだつたのにな～……」

「俺だつてそういうだつつの。でも、森川の奴はまだ付き合つてんだよ

な

「そつなの？」

そいつは意外そうな顔をした。森川の本性は、男子の間では割と知られているのかもしれない。

「ああ。そつき一人で帰つてくの見たぞ」

ガタンと大きな音を立て、俺は立ち上がった。

「な……何？ どうしたの？」

葉山は目を丸くした。

(森川は、もう栗藤さんの事を何とも思つてない。なら、今日一緒に

に帰るのは.....)

栗藤さんは、今日森川に振られる。それを理解した俺は鞄を掴み、教室を飛び出した。

「 横原！？」

四段間隔で階段を一気に駆け下り、下駄箱の中の外靴を荒々しく掴む。

クラスの奴の呼び止めに振り返る事もなく玄関の扉を開いた俺は駐輪場には向かわず、ただ全力で走った。

学校の傍の公園や花壇、ガードレールを横目に走っていると両の田の出来事が頭の中に浮かんでくる。

「！」

俺は、唇を噛み締めた。

息は荒れ、汗が髪を湿らせる。いつものバス停に着くと、いつもベンチに栗藤さんは座っていた。

昔の面影など残っていない、がつちりとした彼女の背中。頭は少し俯き、その後姿はどこか沈んでいる様に見えた。

俺は後ろからゆっくりと栗藤さんの傍に歩み寄った。栗藤さんは俺の足音に反応し、ビクッと体を揺らす。

「 栗藤さん」

「、横原くん.....？」

栗藤さんは顔を上げなかつた。声だけで、俺を俺だと分かつてくれた。

「あ、あの、栗藤さん」

俺の言葉を遮る様に、栗藤さんは顔を上げた。
顔を上げた栗藤さんは、笑っていた。

「、私、振られちゃつた.....」

確かに笑つてゐるはずなのに、その目元では水滴が光つていた。

口は震え、必死に涙を堪えている顎には皺が寄る。

(…………！)

俺はそれを見て、言葉が詰まつた。

彼女は、一体どれ程の辛い言葉で突き放されたのだろう。好きな人に振られた悲しみは好きな人にしか癒す事は出来ず、そしてそれは俺じゃなかつた。

何と声を掛ければ良いのか分からぬ。俺に、彼女を慰める事など出来はしない。今、それが出来るのは森川大和だけだ。

俺は歯痒くて、切なくて、気付けば栗藤さんの両肩を掴んでいた。

「…………、これ、栗藤さんには、関係無いかもしませんけど……」

栗藤さんは目を丸くして俺の顔を見ていた。

「…………栗藤さんにとってはこんな事、どうでも良いかもしませんけど…………」

自然と、栗藤さんの両肩を掴んでいる両手に力が入つた。

「…………俺、森川の球を打ちます。体育祭で、必ず森川に勝ちます。だから、見ていて下さい…………！」

彼女の目から、大粒の涙が零れ落ちた。

第7話「スーパースター」

森川に勝つと栗藤さんに約束してから一週間。体育祭当日を迎えた。

第一試合の相手は一年八組。メンバー表を手に、俺は静かに闘志を燃やした。

「榎原」

葉山が俺の名前を呼ぶ。

「葉山……」

顔を上げると、葉山はそこに立っていた。

「そろそろ時間だな。試合、見に行くぜ」

そう言つて葉山は小さく笑い、俺もつられて笑つた。

第7話「スーパースター」

両クラスの出場生徒がダイヤモンドの白線を横切る。審判を務める野球部員の前で向かい合つて並び、試合開始の合図を待つた。

「それでは、二年三組対二年八組の試合を始めます。礼！」

声を上げ、頭を下げる。そして程なくしてすぐに全員がほぼ同時に頭を上げた中で、俺は森川の目を正面から見た。

「…………」

森川もまた、目を逸らさうとはしない。自信と嘲笑の交じり合つた表情で俺を見る。

「おい榎原、行くぞ」

「ああ」

クラスの奴に腕を引かれ俺はベンチへと戻った。森川はその様子

を最後まで眺めていて、俺がベンチに戻ったのを見届けるとマウンドの方へと歩き出した。軽く足場を慣らし、四、五球投球練習を行う。

長い手足を充分に使うそのフォームは端整で、俺は息を呑んだ。

「ブレイボール！」

クラスの一番打者が白線のボックスの中に立つ。一、二回足場を固めた後バットをピッチャーの方へと向け、気合いを入れる。

「森川くーん！ 頑張つてー！」

八組のベンチから飛び黄色い声援。それは八組の女生徒だけのものでは無く、一組から八組まで、全てのクラスから応援は来ていた。森川は優しく微笑み、手を振った。それを見てまた女生徒が声を上げる。

正に、美男美女。この森川とあの栗藤さんが付き合っていたんだなんて、誰がどう見てもお似合いのカップルだ。

俺はそれを認めたく無いのに、認めざるを得ない。気付けば右手に力が入っていた。

「…………」

森川が体を屈め、右腕を振りかぶる。長い左足が地面を踏みつけるのとほぼ同時に、その右腕は大きな弧を描いた。

次の瞬間、あっという間にボールはミットに収まった。バッターはバットを振る事もなく、ボールの収まつたミットを見て呆然とした。

「ストライク！」

審判の右手が大きく上がる。女生徒の黄色い歓声が飛んでくる。ざわめきと歓声とが交錯するマウンドで、森川は不敵に笑った。

「バッターアウト！」

一回の表、悠然と二者二振にとつた森川は氣だるそぞろマウンドを降りる。

「……あ、あんなの打てねえよ……」

クラスの応援の前で三振したバッターは、恥ずかしそうに笑いながらベンチに戻ってくる。

俺はその様子をネクストバッターズサークルから黙つて眺めていた。

「おい檍原、こっちの守備だ。行くぞ」

「ああ」

心地良いぐらいの金属音。打球はあつという間に外野の間を抜け、森川は平然と一塁ベースを回る。

「おっしゃ先制点～！ 森川ナイスバッティーン！」

八組のベンチから、野太い歓声が湧く。

(くそ…………！)

森川はゆっくりと一塁ベース上で止まつた。それを見て、俺は三塁ベースの付近で力強くグラブを叩く。

力キイン！

またも鋭い金属音。俺はその打球を必死にグラブの中に収める。

「うわーマジかよ！ ついてね～！」

バッターは悔しそうに天を仰いだ。三つのアウトを取つた事で、俺は一塁側のベンチの方へ戻つていく。

その途中で、三塁側のベンチへと戻つていく森川と目が合つた。

「…………」

お互ひ、何も言わずにすれ違つた。

厚い雲がかかつた、薄暗いグラウンド。俺はバッターボックスの中に立つていた。

「檍原ー！ 打つてくれ！」

三組のベンチから聞こえる声援。森川へのそれとは比ぶべくも無いが、その中には女子のものも混じっている。

俺はバットを構え、森川の目を見る。

(大丈夫だ……落ち着け。あれぐらいの球なら、打てない事は無い

…………！)

森川の長い手足が、投球動作に入る。バットを握る両手には自然と力が入った。

(来い 森川！！)

俺は微かな動きすら見逃すまいと、森川の動きに神経を集中させていた。しかし次の瞬間、森川の右腕の動きを田で追い切れなくなる。

それ程に速く、力強く、森川の右腕は一瞬で弧を描いた。
気が付けば、白球はキャッチャーのミットに収まっていた。

「ス、ストライク！」

一拍置いて、審判の右腕が上がる。それより更に遅れ、女生徒達の歓声が湧く。

「な……何今……めちゃくちゃ速くなかった！？」
「全然見えなかつたーーー！」

(……………！)

「バカ野郎！ 手加減しろっつーの！」

キャッチャーは、力を抑えると促す。それ程に森川の球の衝撃は、彼のミットを貫いていた。

ボールを受け取った森川は、またすぐに投球動作に入る。俺は慌ててバットを構え、息を呑んだ。

必死にバットを振る。しかしそれよりも早く、ボールはあつとう間にミットを捉えた。

「ス……ストライク！」

バットを振った俺は体勢を崩し、ホームベース上によろめく。その様子を見て、森川は笑った。

(は……、速過ぎる……………！)

野球と比べて、遙かに近い投手と捕手の距離。90km/h近く森川の球は、野球に換算した場合の体感速度で130km/h近くにまで達する。高校野球の経験の無い俺にとって、それは絶望的な数字だった。

俺が必死にバットを出した時、ボールはもうミットに収まつ

ていた。

バランスを崩した体を支えきれなくなり、思わず地面に手をついていた。バランスを崩した体を支えきれなくなり、思わず地面に手をついていた。歯を食い縛つて顔を上げると、栗藤さんと田が合った。

第7話「スーパースター」（後書き）

たまに、何十とか何百とかという量の評価・感想を貰っている人を見ると、正直羨ましくなってしまう。
もつと頑張ろう。

あと、メッセというものをもらつた事がありません。
誰か、試しに送つてみてくれないかなあ（笑）

第8話「群青日和」

あの日、栗藤さんが見せた涙が頭の中を埋め尽くす。

(栗藤さん……)

俺は立ち上がりベンチに戻りつとした。その時、一滴の雨が頬を伝つた。

「うわっ、雨！」

クラスの女生徒が声を上げる。

「中止になるかな？」

「いや、よっぽどの事じやなきや中止にはならないよ。三年生は最後だしね。去年も大雨の中やつたらじいし」

「ふーん……」

第8話「群青日和」

試合は、終始八組が押していた。野球部二名に加え野球経験者の多い八組は、明らかに地力で三組を上回っている。

ただ、なかなか追加点を奪う事は出来ず、一〇のまま試合は三回の裏を迎えていた。

キイン！

鋭い金属音。打球はサーブとショートの間を走り、俺は横つ飛びで必死にそのボールを抑えた。

「おお、槇原！」

俺は素早く起き上がり一塁を見る。しかし、その時にはバッターは既に塁上を駆け抜けていた。

「よっしゃーナイスバッティーン！」

「チャンスだーっ！」

一塁にも二塁にも三塁にも、八組の生徒が立っている。八組側のベンチが一層盛り上がった。

「ツ、ツーアウト満塁かよ……」

ピッチャヤーは肩を落とし、下を俯く。

「森川くーん！ 打つてーーー！」

八組側ベンチから湧く歓声。森川大和がバッターボックスへと向かう。

「し、しかも森川……。お、終わった……」

クラスメイト達から飛ぶ声援とは対照的に、グラウンドに立っている選手達は落ち込んでいた。今の状況の深刻さを理解しているからだ。

「…………」

俺はゆっくりとピッチャヤーの元へと歩み寄り、そして右手を差し出した。

「俺が投げる」

「！ 横原…………！」

ピッチャヤーは一瞬戸惑った後、俺に白球を手渡した。

一回以降、激しさを増す雨。真横から吹く風。大勢の観客が見守る中、確かに、俺は森川と目が合つた。

俺は大きく右腕を振りかぶる。綺麗に整つた、森川の投球フォーム。俺は見よう見まねで左腕をホームベース方向に掲げた後、右腕で大きく弧を描いた。

鋭い音と共に、白球がミットの中に収まる。

「ストライク！」

審判の右手が上がる。それと同時に、バックの選手達が大きく湧いた。

「ナ、ナイスピッチーン！」

(…………)

俺は冷静を装つてはいたが、内心胸が張り裂けそうになる程緊張していた。

(..... 。結構速いな)

森川はタイミングを合わせる様に、一、二回バットを振る。

「い、
いけるぞ檜原ーっ！」

一塁側のベンチから、身を乗り出して声援を送る葉山。俺は当然それに気付いていながら、顔を向ける余裕が無かつた。

快音を残して、打球が飛ぶ。

- ! ! !

一球目、あつという間に高く、遠くへと伸びた打球は風を受けて流れ、ギリギリの所でファールグラウンドに落ちた。

「ファール！！」

グラウンドが騒然とする。

(森川の野郎……、一球目でいきなり……。しかもあの飛距離……)

嗟に田を逸り、トを向く。

(ダメだ……打たれる。俺なんかが何をしたってあいつは抑えられない……！)

その様子を、森川は笑つて眺めていた。

「檜原一つ、頑張れー！」

（……勝手な事言つんじゃねえ、打たれちまつだろ？が……………）
どうしようも無いハ方塞。気を紛らわせる様に周囲に田をやると、
不安そうな表情で試合を見つめている栗藤さんと田が合つた。

()

そうた……俺は、何か何でも森川に勝つんだ

त्रृ

気が付けば、緊張はどこかへ吹き飛んでしまっていた。

トの上を行き、キャラットチャーハンシットに飛び込んだ。

「ストライーケ！ バッターアウト！」

審判が、高々と声を上げた。

最終五回の表。三組の攻撃。

俺達は既にツーアウトと追い込まれていた。

「頼む！！ 出てくれーっ！！」

俺は、ネクストバッターズサークルから必死に声を張り上げている。

ギイン！ 鈍い金属音を残し、打球は三塁線付近を転々とした。

「サーードー！」

「勝った！」

キヤツチャーが声を上げる。しかし彼は、三塁手が雨で濡れたボールに指を滑らせていた事を知らなかつた。

打球は一塁手の遙か頭上を行き、フェンスに直撃した。

「なつ……！」

それと同時に湧き上がる歓声。その中で、バッターランナーは一塁ベースを踏んだ。

「おっしゃあーっ！」

一塁ベースの上で、両手を上げて喜ぶバッター。それに応える様に、クラスが一丸となつて湧く。

そして俺は、バッターポックスに立つた。

「…………」

森川は悠然とボールを高く上げ、そしてそれを右手で受け取る。そんな事を繰り返しながら、俺がバットを構えるのを待つ。

雨で濡れたグリップ。俺はゆっくりと、両手でそれを擦つた。二、三回バットを振り、そしてそれを肩の所で構える。

一瞬間が流れた後、森川が大きく右腕を振りかぶつた。

今までより速く、大きく、森川の右腕は弧を描いた。

今まで切り裂いて、ボールがミットに飛び込む。

「ストライク！！」

「……は、速すぎる…………」

田を丸くして驚く葉山。俺はそれを視界の端に捉えながら、またバットを構える。

「俺の球は打てねーよ」

唸りを上げてミットに向かつてくる剛速球。俺は、夢中でバットを出した。

「ストライク！！」

またも審判の右手が大きく上がる。バットは決してボールを捉える事無く、ただただ空を切るだけだった。

「追い込まれた……」

より一層、激しさを増す雨。

(は、速すぎる…………)

田を見張る程の姿に、噂通りの運動神経。森川大和は、正に俺が理想とする様な人間だった。

(……そもそも、俺が敵う様な男じゃなかつたって事か…………)
失望と喪失感の中で顔を上げると、雨の中試合を見守る栗藤さんと田が合つた。

「…………！」

「あつと一球！ あつと一球！！」

ハ組側のベンチから湧き起こるあと一球コール。その重圧の中で、俺は力強くバットを構えた。

「つむつむ、雨やばい！ 教室戻る！」

「…………」めん、先戻つてて。私、この試合は最後まで見たいの

「…………」

「つむぎ……！」

「終わりだ」

大きく開く両足、しなる右腕。森川の指先から放たれた白球は、ミットを田がけて唸りを上げる。

鈍い金属音と共に、白球がフェンスに直撃した。

「！」

「ファール！！」

審判の両手が、大きく上がった。あと一球コールがざわめきに変わる。

(……当てやがった)

森川はキャッチャーからボールを受け取り、両手で雨を拭つ。

(……この野郎)

「あ、当たつた……」

バットを握る両手。グリップを通して、ビリビリとした痺れが昇つてくる。

不思議とそれは心地良かつた。

(栗藤さん……俺は、森川の様に出来た人間じゃないけど……)

森川が右腕を大きく振りかぶる。

(でも……)

頭の中にあるのは、栗藤さんの涙だけだつた。
大きさを増すあと一球コール、地面を叩く雨の音。
唸りを上げる白球の、風を切り裂く音が聞こえた。

(でも俺は、栗藤さんを泣かせはしません……！)

雨の音が、止んだ気がした。

心地良い金属音だけがグラウンド中に響く。

無我夢中で振りぬいたバット。それは森川のボールを芯で捉え、打球はあつという間に外野へと飛んだ。

外野に向かつて叫ぶ森川。俺はただその場に立ち止まり、打球の行方を見ていた。

白球は外野に立てられた簡易フェンスを越え、グラウンドの外に飛び込んだ。

その瞬間、耳を劈く大歎声が湧き起つた。

「 ！」

俺はゆっくりと、快音の余韻を味わう様にダイヤモンドを回る。
一塁、二塁、三塁、一つ一つのベースをしっかりと踏み締め、最後の白線を進む。

森川は、そこに立っていた。

俺は真正面から森川の目を見た。森川もまた、ただ真っ直ぐ俺の顔を睨む。

お互い、何も言わずにすれ違った。

最後のベースを踏むと、雨で髪を塗らした栗藤さんと田が合ひ。一瞬、二人の間に静寂が流れた後、栗藤さんは満面の笑みで俺を迎えてくれた。

俺は天を仰ぎ、勝利の咆哮を上げた。

第8話「群青日和」（後書き）

この第8話は、とりあえずこの作品の一つの区切りとなります。多くは語りませんが、ここまで沢山の方に支えて頂きました。本当に感謝しています。

当然これからも作品の続きを書いていきますが、是非またお付き合い頂ければ幸いです。

野球やソフトボールがいまいち分からないという方、この2話は苦痛だったと思います。私もです（笑）そういう事もあって本当は1話に纏めたかったのですが、案外長くなってしまいました。

でもなるべく、野球やソフトボールに興味が無いという方でも楽しんで読める様な描写や展開を心掛けたつもりです。どうか、読み飛ばさず作者に付き合ってやって下さい（笑）

第9話「そして恋はまた廻る」

二年六組、高嶺美華。

程よく化粧の乗った肌、美しく整えられたまつ毛、見る者の目を惹くアヒル口。

“縦に長く、横に細い”をポリシーとする彼女の体型は、そのポリシーに違わずスレンダーなものである。

栗藤つむぎが元に戻りでもしない限り、学校一の美女の座は間違いないなく彼女のものであった。

「ああ～！ クソツクソツクソツクソツ～！ 腹立つ腹立つ腹立つ腹立つ～！」

その高嶺美華は、激昂していた。

右足に履いたローファーで地面を蹴りつけ、拾い上げた小石を思い切り放り投げる。

「あ、あんの野郎～……！ この私を振りやがるたあ良い度胸してるじやね～か……！」

高嶺は右拳に力を込め、ギリギリと歯を軋ませた。

遡る事、五分程前。

彼女が何よりの誇りとしていた“一度も異性に振られた事が無い”時間連続記録は、十四万三千八百八時間でストップした。

「ああーっ、くそー……！ 考えれば考える程憎たらしく……」

高嶺は右手で思い切りコンクリートの壁を殴りつけ、少し間を置いた後、清涼飲水の入ったペットボトルで右手を冷やした。

(じ、人生最悪の日だわ……！)

高嶺は右手に絆創膏を貼りながら、考える。

(さつさと新しい男でも見つけて憂さ晴らししないと、高血圧で倒れちゃう)

絆創膏のゴミをクシャクシャに丸めながらバス停の前の横断歩道を渡ろうとするが、両耳にイヤホンをつけてバス停に並ぶ横原の姿を視界に捉えた。

「…………ワーオ…………」

高嶺美華は眉を細め、薄つすらと笑みを浮かべた。

第9話「そして恋はまた廻る」（後書き）

待つていてくれた方、いらっしゃるでしょうか。

連載再開いたします。

第1弾更新分以上に皆さんの期待に応えられる様頑張りますので、是非また応援よろしくお願い致します。

第10話「絶対不变のダイヤ」

体育祭から一週間。冷えた風が頬を叩き、太陽が落ちるのは日に日に早くなっていた。

俺は今も尚、懲りずにバスで通い続いているのだが……。この日、俺の後ろには栗藤さんがいた。

「槇原くん！ こっち向いてよー！」

「あっ、ああ……」

俺の肩を掴み、彼女は顔を寄せる。一人の顔が近づくのが照れ臭くて、俺はそっぽを向いた。

「…………」

俺が、彼女と会話する事を嫌がっている様に思えたのだろうか。栗藤さんは肩の手を離し、俺から顔を離していった。

「ちっ、ちが……」

俺が慌てて振り返ると、目が合つた。お互い何も言わずに、短い時間が流れる。

彼女は満面の笑みを浮かべ、俺もそれにひられて笑った。

第10話「絶対不变のダイヤ」

「でも、槇原くんがいて良かつたな！」

「えつ？」

俺は頬を赤らめた。

「ほら、バスって夏とかはほとんど人いないでしょ？ 千尋は時々しかバス使わないし、槇原くんいないと私、話し相手いないもん（……そういう意味か……）

でも、それでも俺は少し嬉しかった。この一本のバスが俺と栗藤

さんを繋いでいるみたいで。

もつとも、栗藤さんが可愛いままだったら更に嬉しかったのだろうが……。

「……だね

俺がそう言つと、彼女はまた優しく微笑んだ。

「いよーっ槇原くん！！！ 今日も朝から彼女と登校とは見せ付けてくれるじゃないの！」

「彼女じゃねーっ！！！」

俺は反射的に、葉山に向かって大声を張り上げた。

「そこまで必死になつて否定しなくて良いっつの」

葉山はニヤケ笑いを浮かべながら俺の前の机に座る。

「良い雰囲気だつたらしーじょん

「別に……何でもねーよ。つーか、なんでお前それ知つてんの？」

「いや、お前らと同じバスに乗つてた奴から聞いただけだけどさ。もう最近は結構寒くなつてきたし、バス通学する奴増えてきただろ

「聞くくなよ」

「隠す事ねーじゃねーかよー！ なあなあ、お前らどこまで進んでんのー？」

「ふざけんなー！！！」

俺は机の下から、葉山の右足を蹴つ飛ばした。

「キス

葉山は両手で奇妙なポーズをとる。

「馬鹿やうつ

「抱擁

「しねーつて

「デート」

「だから、そんな関係じゃねー一つの」

「電話番号」

「……知らん」

「メアド」

「……知らない……」

その語尾は、自然と声が小さくなっていた。

「はあーっ！？ お前メアドも知らぬーの！？」

「うるせーな。別に要らねーよ」

「照れんなって。俺、今度誰かから聞いといてやろうか？」

葉山は純粋に、好意からそう言つてくれているのだろう。

「いや……でも本当に良いんだ」

「？」

＊＊＊

放課後。俺はいつもの様にバス停に並んでいる。その両耳にはイヤホンが付いているが、今は例によつて音楽は流れていない。

バス停には高校の生徒が五人程並んでいて、まだ栗藤さんはこちらに気が付いていない様だつた。

ワイヤレスのボタンを外したりしながらバスが来るのを待つていると、遠くの方から女生徒の罵声が聞こえる。その声は少し高嶺さんに似ている様な気がしたが、それは流石に氣のせいだろう。

そう言えば、高嶺さんには彼氏がいるらしい。そりゃあ、あれだけ美人なら彼氏の一人や二人いて当然だろうが……。

(まったく、羨ましい話だ。あーあ、俺には縁の無い話だろうなあでも、そう思つてるのは実は俺だけかもしけなくて、人生はいつもが起こるか分かつたものじゃない。

誰かに右肩を掴まれて後ろを振り返ると、そこには高嶺さんが立っていた。

(ーー 高嶺さん！ 本物！！？)

「ちょっと……この後少し時間無い？ 話があるんだけど……」
惹き込まれそうな長いまつ毛、潤った唇。大きな黒目は真っ直ぐ俺の目を見つめていて、俺は一瞬で、それらに見入ってしまってた。

「え……話つて、何……」

その時、いつもの停車位置にバスが止まる。音を上げ、その扉が開いた。

並んでいた生徒達は一人ずつ乗り込んでいく。その中には、栗藤さんの背中もあつた。

(……)

「ちょっと、向こうの方行こうよ！」

高嶺さんは俺の腕を掴み、バス停と反対方向へと走り出す。
……気が付けば俺は、その腕を払っていた。

「ごめん。俺、このバス乗らなきゃいけないからー。」

そう言つてバスの中に乗り込むと、栗藤さんと目が合つた。彼女は満面の笑みを浮かべ、俺はまた、つられて笑つた。

作者の「ひば（読み飛ばし句）

“いつも皆様はじめまして。『』の作品を書いている人です。

この作品、明らかに作者の容量を超える好評を受け、感激に満ち溢れています。本当に本当に、ありがとうございます。

そんなある日、『』のサイトのメッセで『登場人物の設定画の様なものを見てみたい』といつお言葉を頂きました。興味を持つて頂けているという事で、本当に喜ばしい事です。

ところが事でとりあえず、書いてみました“高嶺美華候補その1”。（『』の作品の最初のページに載せておきます）

作者自身、良く分かっていません。『コレを栗藤さんの昔の姿って事にすれば？』と言われば、まあそれでも良い様な気もします。適當です。

しかも、“別にスキヤナーとか使つまでも無いか”と携帯電話の写メで撮つただけ。（と書つか、スキヤナーの使い方が良く分からないのですが）

でもまあとりあえず高嶺さんの顔、こんなもんかと以後分かつておいて頂ければ報われます。

何故楳原や栗藤、森川や葉山でなく高嶺なのか？と言われば、この人が一番描きやすそうだったからです。

今後、その2やその3、また、他の登場人物のそれも描ければまた

載せてみたいなあと思つよつた氣もします。思わないよつた氣もします。

とつあえず、私のへたくそな絵で作品のイメージが崩れてしまわな
い事を祈りつつ、私はお風呂に入るだけです。

11月8日

追伸

上記のまま投稿しようと思つたら、最低600文字以上は書けとか
言われてしまつた。

第1-1話「宿敵」

十一月四日。この日、北海道の大地に初雪が降った。

バスの中は人で溢れ返り、槇原太陽と栗藤つむぎは少し、会話する機会が減っていた。

そんな、人と人との所狭しと同居する車内。そこに、その男はいた。

第1-1話「宿敵」

『カニ、たゞベ行こ』『はにかんでいこつ』

その男はどうやら、本気で人を好きになるという事が無いらしい。

学年一の美女と言われていた栗藤つむぎを見た時も、高嶺美華と付き合つてみた時も、心の底から突き上げる様な情熱に駆られた事が無い。

バスの一一番後ろ、窓際の席で、その男は目を瞑っていた。

腕を組み、足を組み、その両耳のイヤホンからは軽快な音楽が漏れ出している。

槇原のそれとは違い、その男が耳にイヤホンをつけている時は、

必ず大音量で音楽が流れている。

(.....)

男は、日常に退屈していた。綺麗な顔立ちをしている彼の元には日々異性が集まるが、彼はそれらに興味を抱く事が出来なかつた。

それでも男は試験的に、マウスで動物実験を繰り返す様に、女生徒からの交際の申し込みを断つた事は無い。

『付き合つてみれば、好きになるかもしね』

その考えに至り、女生徒から申し込みがあればとりあえず付き合つてみる様になつたのは、中学三年の冬。

付き合つてくれと言われば承諾し、しばらく付き合つてみてそれでも興味を持てなければ、別れる。彼はそんな事をどれだけ繰り返したのだろう。

高校に入学して一年半。そろそろ彼は、高校時代にも青春を見出す事を諦めていた。

道路上にできた突起部を車輪が捉え、ガタンと揺れる。

吊革を掴んでいない生徒達はバランスを崩し、慌てて傍の鉄棒を掴む。

最後列の彼は目を覚まし、ゆっくりと目を開く。

ぼやけた視界を晴らす様に男は首を左右に振り、両耳のイヤホンを外した。

スカートの裾から見える、肉付きの良い脚。背負った鞄が食い込む肩。そして一般水準の女生徒と比べ、確実に一回りも大きい白い顔。

男の心の底から、情熱が突き上げた。

第1-2話「引力」

雪が次第に積もり始め、バスの中はより一層人で埋め尽くされる。

バスが人で混み始めてからは、あまり栗藤さんと話せていない。お互い、どこか恥ずかしさがあるのでう。それに、最近彼女の祖母が倒れたらしく、栗藤さんは時々病院にお見舞いに通う様になっていた。

この日の朝も、俺は一人で漫画雑誌を読みながら、時折、栗藤さんを眺めていただけだった。

第1-2話「引力」

「つー訳で、もう中間テストも近いからな。全員、しっかり勉強しちけよ」

担任の先生が右手の出席簿をぱたぱたと叩きながら、全員にテスト勉強を促す。

俺はそれを何となく頭の端に留めながら、栗藤さんの事を考えていた。

「あ～あ、テストまじだるいッス～」

先生が教室を出た後、葉山が両腕を大きく伸ばしながら俺の方に近づいてくる。

「そうだな」

俺は、何となく、応えた。

「あ、冷た」

葉山は不満そうな表情を浮かべた。

「また、栗藤さんの事考えてた？」

…………。

「さあな…………」

最近、頭の中で栗藤さんにについて考えている事が多い。昔も多かつたが、最近はそれも減ってきていたが…………。

「恋か…………」

葉山は嬉しそうに、満足気に、笑みを浮かべる。

「さあ…………な…………」

その言葉は、葉山には意外そうだった。

「否定、しないのか」

…………。

「どうなんだろ? な…………。栗藤さんの事を好きなのかどうかも、昔の栗藤さんと今の栗藤さん、どちらを好きなのかも。分からん」俺は考えるのが気だるくなり、机に顔を伏せた。

「…………。その答え、簡単に出してやろうつか?」

俺は体は机に突つ伏したまま、首から上だけを起こした。

「よろしく頼む」

葉山は笑って、人差し指で俺の額をついた。

「お前最近、どうちの栗藤さんの事考えてる?」

。

「それが、答えじゃねーの?」

葉山は俺の頭をポンと叩き、教室を出て行った。

「急げよ。バスに間に合わねーぞ」

「…………」

地面に積もった雪に足跡をつけながら、バス停に向かう。

そこには栗藤さんが一人で立っていて、俺は嬉しくなった。

「よ、よつ

「槇原くん！」

栗藤さんは一いちらに気付き、透き通った声を上げる。

丁度バスがやってきて、俺達はそれに乗り込んだ。

俺達は、二人で一番後ろの席に座り込む。そこが一番、落ち着いて話す事ができる。

「最近、あんまり話せてないよね」

俺は頬をかきながら、そう言った。

「う、うん……。人が多いと、何か恥ずかしいって言つかな、ね」

栗藤さんは恥ずかしそうに頬を赤らめ、俺はそれを、どこか愛らしくも感じていた。

それから俺達は、学校の事、家族の事、趣味、スポーツ、好きなアーティストについてまで、溜まっていた話題を全て吐き出する様に、語り合つた。

その時間は何よりも貴重に感じられ、気が付けば、バスは栗藤さんの祖母が入院している病院の前で止まつっていた。

「あれ？ 降りないの？」

降りる仕草を見せない栗藤さんに向かつて、俺は尋ねた。

「あ、うん。今日は良いの。親戚の人達が来てるから」

俺は心中で、ガツッポーズをした。これでまだ、一人でバスに乗つていられる。

「あ、じゃあ私、ここで」

いつものバス停。栗藤さんは定期券を運転手に見せ、最後に軽く手を振りバスを降りた。

一人になると、ある種の満足感の様な、また“もつと話していたかつた”という喪失感の様な、言い様の無い感情に駆られた。

「…………」

俺は気を紛らわせる様に、鞄の中から数学のノートを取り出そうとした、が。

「…………無い」

どうやら、学校に忘れてきてしまったようだ。

今日は金曜。週末テスト勉強をするのには、ノートが必要。

俺は大きく溜息を吐き、次のバス停で降りた。

(…………めんどくさ…………)

下校中に高校まで逆戻りするのは、高校入学以来初の経験かもしない。定期券ゆえに金銭的な負担は無く、それが俺の背中を推していた。

二十分後、俺は再び学校行きのバスに乗り込む。

俺は首を一、二回鳴らしながら、運転席の真後ろに座った。一人なら、座るのはもつどこでも良い。

鞄の中から音楽プレイヤーを取り出し、それを再生はせずに目を瞑る。

約五分後、栗藤さんが降りたバス停に止まった。

俺は別に特別な意味は無く、目を開く。

バスに乗り込んできた、栗藤さんと目が合つた。

「…………。

「…………、あはっ」

「…………、何してんの？」

俺は驚きと期待とが交じり合つた様な不思議な感覚の中での、そう尋ねた。

「…………えと、病院…………」

もしかして。確かめる事は出来ないし、確かめようとも思わないけど。

もしかして、俺と少しでも長く話していたかったから、今日

はお見舞いには行かないって嘘をついたのか。

不思議と、自然に笑みが零れ、栗藤さんもまた、笑った。

「後ろ、いこつか？」

「う、うん！」

栗藤さんは嬉しそうに、そう答えた。

第13話「土愛直哉」

「一千五百四十九円です」

「コンビニの制服に身を包んだ店員は会計を読み上げ、レジの前の男は財布を取り出した。

「あー、直哉お前九円ある?」

男は財布の中をかき分けながら、隣に立っている男に声を掛ける。その男は自分の財布を取り出すと、当然の様にその中から一円玉一枚を取り出し、それを手渡した。

「おっ、サンキュー！」

彼の財布の中には、常に大量の財布が詰まっている。

一年五組、土愛つちあい直哉なおや。

おおよそ、初対面の相手には男子高校生とは見られないその幼い容姿、毛先のうねった栗毛。

彼もまた、栗藤つむぎが美しかった頃、彼女に心を奪われた一人の少年だった。

第13話「土愛直哉」

七ヶ月前。桜の花びらが美しく舞う季節、直哉は樋原達の通う高校の新入生として、その校門をくぐる。期待と不安、初々しさに満ちた表情。周囲の友人に頭を叩かれながら、直哉は入学式に出席した。

「おい、おい直哉！！ 見ろ、あれ栗藤さんー！」

「栗藤さん？ 何だよそれ、隼平」

「え、お前知らぬーの？ 絶世の美女栗藤つむぎー」この学校一の

ダントツ美人だつてさ。野球部の先輩に聞いた

隼平は直哉の方には顔を向けず、つむぎを視界に捉えたまま離した。

「……それにしてもマジ美人。あんなん反則じゃん。あ～あ、高校生だし、やっぱ一度はああいうのと付き合つてみてえよなー」

直哉はその話を半分に聞きながら、自分も目を向けてみた。

整った顔立ち、可愛らしい仕草、笑顔。

何をどう見たつて美人である事は一目瞭然だつたが、隼平の様にその時からつむぎに夢中になる事は無かつた。

「ふ～ん……」

直哉は隼平の話に耳を傾けながら、視線を元に戻した。

入学式が終わつた後、直哉は隼平と一人で自転車に跨つた。初めて通る道、初めて見る風景。それら一つ一つを記憶しながら、澄んだ風の中をゆっくりと駆け抜ける。

「おっ、こんな所に店あつたんだ。入ろうぜ」

家だけが並ぶ住宅街。その中に溶け込む様に、小さな商店が一つ佇んでいた。

「！」

自動ドアを開き中に入ると、隼平は思わず声を上げる。

黄色い声、爽やかな空氣。レジには、栗藤つむぎが立つていた。

「うわっ……、マジ？ 栗藤さんだ！」

隼平は小声で直哉に耳打ちした。それをよれに、直哉は平然と店の中に入る。

「おっ、その制服。青山生？」

ふいに声を掛けられ、隼平は体を硬くした。

「はっ、はい！」

「新入生か～。初々しいなあ」

「…………」

レジの前で鼻の下を伸ばしている隼平をよそに、直哉は一人で5

〇〇円のペットボトルとスナック菓子を棚から取り出す。

「うわっ、お前もう何買つか決めちゃったの！？ はえーよー！」

レジまで戻ってきた直哉に気付き、隼平も駆け足で飲み物の売り場へと向かった。

「…………」

そして直哉とつむぎは、一時的に一人になつた。

直弥は、つむぎの事を異性として特別意識している訳では無かつたが、当然、まったく意識していない訳ではない。直哉の目から見ても、美人は美人だ。

直弥は静かに商品をつむぎの前に差し出し、つむぎはそれを受け取つた。

つむぎが商品のバーコードを読み込むと、商品の値段が表示される。

「三百一十八円です」

「…………」

直弥は、財布のチャックを開けた。

そしてその中から百円玉を三枚取り出し、次に十円玉、一円玉……と、しどろもどろに小銭を取り出していく。

「わっ。もしかしてピッタリある？」

「あっ、えー……と、多分……」

百円玉三枚、十円玉一枚、五円玉一枚、そして一円玉三枚。

直弥は、九枚の小銭を差し出した。

「わっ、嬉しい！」

「！！」

白く、爽やかな空気がその場に溢れ返つた。

大きな瞳、緩やかな口元、笑う目元。澄み切つた明るい声が、直哉の心の奥底に心地良く響き渡る。

そして直哉はその口から、大量の小銭を持ち歩くようになつた。

第14話「シーソーゲーム」

『力二、たゞべ行こう』はにかんでいこう。

両耳のイヤホンから漏れ出す軽快な音楽。それは男の意識を外界から遮断し、男は自分を呼ぶ声に気が付いていなかつた。

「おい麻柄、麻柄！」

傍の男は痺れを切らし、右肩を荒々しく掴む。そうしてようやく、男は両耳のイヤホンを外した。

第14話「シーソーゲーム」

「お前、それ音量でかすぎだろ！」

男は声を荒げ、麻柄のイヤホンを奪い取る。それを軽く受け流す様に、麻柄は笑つた。

麻柄杏輔。まがら きょうすけ生まれつき真っ直ぐな、細い髪の毛。平均的な男子と比べて、麻柄は少し背が高かつた。

「『めん』めん。でも、コレが無いどどうもね」「つたく。まあ、それは良いとして……」

「良いとして？」

「お前、高嶺さんと別れたらしいな」

「…………」

麻柄は男から視線を逸らし、後ろを向き直して歩き出す。

「お前なー。高嶺さんのどこが不満なんだよー。高嶺さんと付き合いたくても付き合えない奴なんか山程いるんだぞ！」

「いや……だから、その人達の為に断腸の思いで別れたんだよ。俺は

麻柄は、頭に拳骨を喰らつた。

「いつて～。別に俺の勝手だろーが」

「だから、そんなんなら最初から付き合つなつづーのー！」

「……付き合つてる内に好きになれるかもしないじやん」

「あり得ないね。そのセリフ、今まで何百回聞かされてきたか」

男は呆れたように両手を上げ、溜息をついた。

「そんな事言つて良いのかな～。俺、実は好きな人出来たんだよね

「は？」

男は目を丸くして聞き返した。

「何！？　　お前、好きな人できたの！？」

麻柄は頷いた。

「ま、マジで！？　誰！？」

「いやそれが、名前は知らんのだけど……」

「…………。うつわ～、お前も遂にか～」

「今までお前のセンスが悪かつたんだよ。高嶺だの栗藤だの、訳の分からんのばっかり勧めやがって」

「訳分からねーのはお前だ。……いやまあ確かに、栗藤さんはバスになっちゃつたけど」

「？」

「お前にや関係ねー話だ。それより、放課後見に行こいぜ。俺ならそいつの名前分かるかもしんねーし」

「…………いーけど」

「おつけー。んじゃ、帰りのSHR終わつたらお前の教室行くから。じゃな」

そう言つて、男は自分の教室へと走つていった。

その背中を見ながら、麻柄も手を振つた。

* * *

「おっしゃ、行こーぜ！」

麻柄のクラスのS.H.Rが終わるとほぼ同時に、男は麻柄の教室へと入ってきた。

「はや

「早くしねーと見逃しちゃうかもしれねーからな。で、噂のそいつはどこにいんの？」

「知らねーよ。でも今朝は同じバスだったし、多分帰りも同じかな」「おっ、んじやすぐ行こーぜ」

「おい麻柄！－！　お前今日掃除当番だぞ！」

教室の中から聞こえてくる罵声。それは耳を傾ければ、女性のものだった。

「…………」

「麻柄はイヤホンを両耳につけ、そのまま教室を出ようとする。

「麻柄！」

「…………」

「麻柄は不満そうに、伏目がちに振り返った。

「…………、ちょっと待つてて」

男にそつ言い残し、麻柄は掃除用具箱の中からモップを取り出した。

「お前、何回連續で掃除サボれば気が済むんだよー。今日水汲みとゴミ出しなー！」

「…………。お前、手伝う？」

「麻柄は、居た堪れない目で男の顔を見る。

「…………いや、またの機会に」

「くっそー、掃除ぐらい別に良いじゃねーか

掃除を終わらせた麻柄は、不満そうに顔を歪ませた。

「ま、とにかく急ぐぞ。早くしねーとバス来ちゃうんじゃねーの？」「やっぱ。そもそも時間だ」

教室の時計に目をやって、麻柄達は教室を飛び出した。

玄関で靴を取り替え、氷の張った地面で転ばぬ様に、摺り足の様な走り方でバス停へと向かう。

「いるかな」

バス停に着くと、麻柄は辺りを見回した。自転車通学が出来なくなり、バス停は大勢の人で溢れ返っている。

しかしその人込みの中で麻柄はすぐに、栗藤つむぎの姿を捉えた。

「あ、いた、いた！ あれあれ！！」

麻柄は男の頭を掴み、それをつむぎの方へと無理矢理向ける。

「！」

男は驚愕した。

そして、丁度バスはやってくる。

「お、お前の好きな人って……あいつ？」

「あつ、何？ やっぱり知ってる奴？ んじや、メールでも明日でも、名前教えてくれよ」

「あ、ああ……」

バスの扉が開き、人がその中へとなだれ込む。その最後尾、麻柄はバスに足を掛けた。

「んじやな。俺はこのバス乗つから。シーコーアゲーン、アデュー。

葉山

右手の人差し指と中指で軽く敬礼し、麻柄はバスの中へと乗り込んでいった。

第15話「蓼食つ虫も好き好き」

(麻柄が、栗藤さんの事を…………)

葉山は、この事を楳原に言つべきか考えていた。

(楳原……)

楳原が、栗藤さんが好きだとはつきり認めないのは相変わらずだつたが、恐らくは、好きで好きで堪らないのだろうと葉山は考へている。単純に、恥ずかしがつていてるのだ。

(なら、片方にだけこの状況を話すのは反則? それならお互
い知らないまま……いや、でも)

自分の事では無いにも関わらず、葉山は真剣に悩んでいた。一人共葉山にとつて親友とまで呼べる人間であり、そこに優劣など無い。葉山は天井を仰ぎ、ひとつ溜息をついた。

(……とりあえず、様子見だな)

第15話「蓼食つ虫も好き好き」

[.....]

隼平は、葉山のそれよりも深く、長く、大きな溜息をついた。

「何? どうしたの?」

隼平のクラスメイトである淳^{あつ}が声を掛ける。

[.....]

隼平は少し間を置いてから、口を開いた。

「お前、栗藤つて一年生知つてる?」

「ああ! アレだろ。一年生にもの凄い美人がいるつていう。顔は
知らんけど」

「そう、その栗藤」

「その栗藤さんがどうかしたの？」

隼平はもう一度、溜息をついた。

「完熟つて感じ」

「何それ」

淳は、怪訝そうな顔をした。

栗藤つむぎの美貌は、一学年の生徒の間にまで広まっている。元々、学校中の注目を浴びる美人であった彼女の美貌は、瞬く間にニコースになっていた。

隼平はその事を淳に話し、愚痴にも似た思いの丈を吐き出した。

「ふーん…………。まあ、どっち道俺は栗藤さんの顔知らなかつたからなあ。いまいちピンと来ないけど、それ程嘆く様な事なら相当ショックだつたんだろうな」

「当然だつづーの！！ くそー……。そり気に俺、栗藤さんの事本格的に狙つてたのによ！！」

「それ、無理ありすぎるだる…………。相手は学年一の美人だつたんだろ？ ライバル多すぎで、お前の入る余地なんかねーって

「やがましい！」

隼平はボディーブローを決めた。淳は腹をおさえ、その場に蹲る。

「お、お前……バカ野郎

「天誅なり」

隼平は悪びれる事無く、むしろ踏ん反り返つて腕を組んだ。

「あ！ でもそれなら逆に、今競争率低いんじゃない？ 今なら、お前でもチャンスあるかもよ」

「バー力。今だったら向こうから頼まれたつて断つてやる。つーか、今なら競争率低いどころかライバル〇だ。マジで不細工になつちまつてんだからな」

「そんなんもんか？ 性格で選んでる奴とか、いくらなんでも一人もいないつて事は無いだろ」

「いないね。そんな奴がもし存在したら、俺が出向いてつて前歯折つてやる」

「何でだよ

淳は呆れ顔でツッコミを入れ、その時丁度昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「ヤバ、次つて集会だよね。体育館?」

隼平は周囲を見回す。

「多分。行くか

隼平と淳は自分の席へと戻り、椅子を持ち上げた。
しかし急いで教室を出ようとした時、教室の隅の席で机に突つ伏して寝ている男がいる事に気がついた。

「おい直哉! 早く行くぞ!」

すると隅の男は眠そうに頭を上げ、口を開く。

「…………今日の集会って、一年生も一緒に?」

「いや、今日は学年集会だろ? 一年生だけじゃねーの。とにかく早く行くぞ」

そう言つて、隼平と淳は教室を出て行つた。

「…………

ちえ。

誰もいない教室の隅の席で、直哉は小さく呟いた。

第1-5話「夢食つ虫も好き好き」（後書き）

基本的に。

私は小説の執筆は全てパソコンのメモ帳を使用しているんですけど、私の中では『一話一話、スクロールが出来るまで書く』というのが基本的なノルマです。

つまり、どんどんどんどんと書いてついでスクロールが出来る様になるまでは書こう、という感じです。

とは言え、今まで何度も何度も何度も何度も何度もノルマぶち破つてきてるんですけど。

とりあえず、今回はギリでした（規定ノルマ + 一行）。

第16話「降雨は予告してくれはしない」

「え？ あそここの商店、栗藤の親戚がやつてるの？」

「うん。だからたまに手伝つてるんだ」

朝、大勢の人で混み合つたバスの風景。槇原と栗藤は肩を並べて立つていた。

「 McConnellにするよ」

「ほんと？ 喜ぶよ」

第16話「降雨は予告してくれはしない」

「栗藤さんが働いてた店に行く？ バーカ一人で行けよ」

隼平は不機嫌そうに直哉を突き払う。

「なつ……お前、あんだけ栗藤さん栗藤さん言つてたくせに！」

「美人だつたからな。今はもう知らん」

そう言つて隼平は、人差し指で直哉の額を突いた。

「例の店、行きたいなら一人で行け。俺は行かねーぞ」

「…………」

直哉は悔しそうに、右手で額を擦つていた。

* * *

(くそ) 隼平め、どうしようもない奴だ！！！)

放課後、直哉は一人で雪道を歩いていた。

口から出る白い息、赤い頬。両手を擦り合わせながら、商店への

道を少し駆け足で進む。

(バチ当たつちまえ!)

直哉が、悔しさ混じりに足元の氷を蹴飛ばした時、雲が一滴頬を伝つた。

(雨か……、帰りはバスだな。確かあの店のすぐ傍にバス停があつたよな)

夕しゆりに陰る雨 直哉は西足のヘルスを更に早め
の様な形で商店へと向かつた。

」
」

少し息を切らしながら直哉が商店へと着いた時、雨は本降りになつてきていた。

会いたいという期待と、実際に会つた時の緊張への不安とを抱えながら、自動ドアへと進む。

目が合つた。

() !

寒さのそれとは違う理由で、赤らむ頬。

直哉はすぐ田を逸らした。

（！）覚えててくれた

直哉は一応、栗藤とどんな会話を交わすか想定を繰り返して
いた。

しかしそんなものは何の意味も成す事無く、案の定直哉の頭の中は真っ白になっていた。

直哉はそもそも、何か申し訳ない事をしているかの様に商品を

取り、レジへと向かう。

何か話し掛けられている事も、自分がそれにどんな対応をしているかも分からない。ただただ機械的に会計を済まし、余韻を挟む事なく店を飛び出る。

「…………！」

店を出ると直哉は大きく息を吐き、久しぶりに呼吸をした感覚を味わった。

（は、話せた…………！！）

直哉の体を内側から埋め尽くす、心地の良い興奮。外の寒さも、今は大して気にならない。

（…………、でも……）

直哉は、麻柄とは違う。

好きである事に変わりはなくとも、栗藤つむぎが太ったという事実は事実。直哉も、そこは充分に理解していた。隼平の言葉が頭の中を埋め尽くし、直哉は少しその場で立ち止まった。

視界を遮るかの様な激しい雨。今の心情とも折り合って、直哉はただ天を仰ぐ。

「…………」

少しの間ただ呆然と立ち尽くしていると、音を立て自動ドアが開いた。

「？」

後ろを振り返ると、再び栗藤と田代が会う。

「あの…………もしかして傘、無いの？」

氣恥ずかしそうな笑みを浮かべながら、栗藤は一本の傘を差し出した。

「これ、使って？」

「えつ…………いや、いやいやいや！ 大丈夫です！ 帰りバスですし！」

直哉は顔の前で両手を振る。

「良いいから良いから。どうせ、私は雨が弱くなるまで店にいれば良

いんだし

そう言つて栗藤は直哉の手を取り、傘を手渡した。

「ね？ 青なら恥ずかしくないでしょ？」

そう言つて、栗藤つむぎは微笑んだ。

「…………！」

赤らむ頬を隠す様に、直哉は傘を受け取った。

「あ、ありがと……」

寒さで回りにくくなつた口でしゃべる、直哉は一三回頭を下げて走り去つた。

「また来てね～」

栗藤つむぎは、その背中に手を振り続けていた。

「はつ…………」

息を切らして店から離れ、もつ後ろを振り返つても栗藤の姿は見えない。

「…………」

直哉は、右手に握つた傘に視線を移した。

開いた傘を激しく叩く雨粒。地面に溜まつた水溜りに足を入れても、不思議と氣分は悪くない。

「…………」

直哉はバス停を通り過ぎ、鼻歌混じりに歩いて帰つた。

第17話「鳴動」

「クリスマス、近いな……」

放課後。気だるそうに机に付した葉山が、そう呟いた。

「……………そうだな」

様々な考えが頭を過ぎる中で、俺はとりあえずそう返す。

「お前、良いのか?」

「……………何がだ」

「分かつてゐるだろ」

分かつてゐる。栗藤の事を言つてゐるのだらう。

「別に、どうしようもねーよ」

「……………告白、しうよ」

俺は、動搖が顔に出でたくなるのを必死に押さえ込み、平静を装う。

「……………お前、好きなんだろ? 栗藤さんの事」

「……………どうだろな」

葉山の視線を背中に感じながら、俺は教室を出た。

第17話「鳴動」

バス停に向かうと、そこには栗藤が立つている。

「こんちは」

彼女はこちらに気付くと、可愛らしく笑顔を向ける。俺はそれに相応しい返事を返し、彼女はまたそれに対して言葉を連ねる。

一見して、彼氏と彼女であるかの様な風景。それは気分が良く、楽しく、心地の良いものであった。

バスに乗り込むと、二人で最後列の席へと座る。

そうして、栗藤がバスから降りるまで、絶え間無く会話を重ねる。喻えようも無く楽しい筈のひと時。しかしこの口の俺は、会話を楽しみつつ、心のどこかでもやもやしたものを抱えていた。

(俺は……好きなのか？ 栗藤の事を……)

その答えは、本当に分からない。

一緒にいると嬉しい。話していると楽しい。

でもそれは、友

人関係としてくるものではないのか？

……何故なら俺はもう、栗藤を可愛いと思つてはいない筈だ。だとしたら、一緒にいて楽しいと感じるのは、友達だから。

分からぬ。

全ては、“未練”なのだろうか。一年半という年月が貯め込んだ愛情を、今少しづつ支払い続けているだけなのだろうか。

(……)

分からない。

俺は……一体、栗藤の事をどう思つているのだろう。

「ねえ槇原くん、聞いてる！？」

少し考え込んでしまつていて、栗藤が俺の肩を揺らした。

「あっ、ああ。聞いてるよ」

「ほんとに？」

栗藤は不満そうに、元々膨らんだ顔を更に膨らませた。

「まあ私そろそろだから、降りるね」

そう言つて栗藤は足元の鞄を持ち上げ、立ち上がった。

(えつ……)

本能的に、頭で考えた訳でなく、思わずその腕を掴みそつになる。

そして、理解した。

(ああ……、これが)

栗藤は、定期券を運転手に見せ、バスを降りる。

一分でも。一秒でも。刹那の一瞬さえ、少しでも長く一緒にいた

いと感じる。

それが、"好き"だ。

バスが栗藤を通り過ぎようとした時、俺は窓の外に手をやつた。

彼女は、俺に向かつて手を振っていた。

「.....」

そして、理解した。これが。

「葉山さん！」

槙原を先に帰し、葉山が一人で残つた放課後の廊下。隼平が葉山を呼び止めた。

「お、どーした？」

「あの、前栗藤さんの事好きな奴がいるって言つたじゃないすか」「以前は、学校中そんな奴だらけだったからな。つーかお前もだろ」「俺は、栗藤さんがブスになつた時点で止めましたよー」

隼平は両手で否定のジェスチャーをとる。

「.....まあ、それが一般的だ」

「いやそれが実は、土愛はまだ栗藤さんの事が好きとか言つてて.....」

葉山の胸に、小さな黒い塊が落ちる。

「それで？」

「それであいつ、今度栗藤さん」告るとか言つてたんすよ？ マジ信じられないっすよね！ いやそりや、確かに栗藤さんって性格も良いかもしれないんですけど、やっぱり顔がアレじやどうじょうもな

第1-8話「女神に惚れた男達」

「槙原……」

翌日の放課後。人のいなくなつた教室で、葉山が俺の元にやつてきた。

「どうした?」

葉山が深刻な表情をしている理由も、当然俺には理解できない。

第1-8話「女神に惚れた男達」

葉山は俺の襟元を掴み、かつてない程真剣味を帯びた表情を見せた。

「後輩の土愛つて奴が、栗藤の事を好きらし……」

(――)

「それも今日か明日、とにかく近い内に告白する気だ……」

葉山はゆっくりと、一言一言に重みを帯びさせて語る。

「お前は……どうするんだ」

。

その言葉は、俺の胸に深く突き刺さつた。

「……どうもいつも、ねえよ……。そいつの告白を邪魔する権利は無い筈だ」

「…………。そりや、そつだが……」

葉山は納得のいききらない顔をしながら、襟を放した。

「だけど……もし、もしも栗藤が土愛の告白を受けたらお前、どうするんだ……? お前は、それで良いのか!?」

(――)

そんなの、嫌に決まつてゐる。でも……。

「……その時は、その時だ！」

葉山は歯を噛み締めた。

「こつまでも意地張つてんなよ！お前、栗藤の事が好きなんだろー？もし、もし！」のまま栗藤が土愛と付き合つたら、お前一生後悔するやー！」

「…………栗藤が自分で土愛の事を選んだなら、俺がそれに口出しする事はねえ」

本心では無い。でも、告白して振られるとこう想像が怖すぎて、俺は自分の感情に蓋をする。

「…………」

葉山は、今にもその拳を振るいそうな、そんな表情で俺の顔を睨んだ。

「お前、告れよ…………栗藤に…………もし…………もし土愛が先に告白して、それが成功しちまつたらお前、もう告白するチャンスすら無くなるんだぞ！！…………そんな思いは一度としたくないって、森川の時にそう思つたんじゃねーのかよ…………」

「…………」

心の中が暗くなる。決別した筈の過去が、頭の中を埋め尽くす。

「俺は…………お前の恋を応援してる中で、色んな奴を見てきた」

葉山は深く息をつき、少し荒れた息を整えた。

「…………？」

「栗藤がブサイクになつた途端、あつさり別れちまつた奴。栗藤が太つてからこそ、栗藤に興味を持つた奴。栗藤の外見が変わつても、変わらず好きでい続けた奴」

「

無数の感情が、頭の中で交差する。

「お前はどうなんだ？ 横原」

(…………)

「…………」

葉山は、隣の机の上に置かれたトランプを手元に引き寄せた。念入りなシャッフルを繰り返した後、裏のままそれを机の上に置く。

「赤のマークか黒のマークか、選べ」

これは、昔一度だけやつた事がある賭けだつた。ハート・ダイヤか、クローバー・スペードか。一番上的一枚を捲り、そのマークの色を当てる。

「赤なら、告白しない。黒でも……、告白しない……」

俺は、この賭けを受けなかつた。

「 そうか。考え抜いて考え抜いて、それでもお前がそう言つながら、俺はもう何も言わねえよ」

葉山は静かに。爽やかな笑みすら最後には浮かべ、教室を出て行つた。その笑みこそが、何より俺には響いた。

誰もいなくなつた教室で、俺は一人俯く。

(しようがねえよ…………。俺は、今の関係で幸せなんだ。もし……もし万が一付き合えるかもしれないチャンスがあつても、今の関係が壊れるかもしれないのは耐えられない)

机の上に置かれた、トランプの山に視線を落とした。

「…………」

何となく、その一番上のカードを開いた。結果の分かりきつた、無為な賭け。

「！」

一枚のカードに描かれたジョーカーのイラストが、俺の目に飛び込んできた。

(…………！…)

『三週間ぶりに見かけた彼女は、なんか知らない間にバスになつていた』

『栗藤さんは一、二度辺りを見回した後、そのソフトクリームのカツプを鞄の中にしまい込んだ』

『俺は公園の芝生の中で、泥だらけになつたキー ホルダーを見つけた』

『同じ学校の制服を着た男と一人で歩く、栗藤さんの姿を視界に捉えた』

『……、私、振られちゃった……………』

『俺は天を仰ぎ、勝利の咆哮を上げた』

『ごめん。俺、このバス乗らなきやいけないからー。』

『…………えと、病院…………』

一年半、ずっと片思いしていた事を考えれば、少し短いかもしれない四ヶ月。でも、その四ヶ月の間に詰まりに詰まつた想い出が、胸の底から溢れ出る。

俺は、教室を飛び出た。

廊下を駆け抜け、階段を飛び降り、上靴のまま外へと駆け出す。

(…………栗藤！ 栗藤……………！…)

一瞬たりとも足を緩める事無く、バス停に辿り着くと、少し離れた所で栗藤が見知らぬ男と向き合つてしているのが見えた。

(…！ 栗藤つ……………！…)

「好きです！！ 付き合つて下さーーー！」

俺の耳にまで届く、初々しい告白。男は頭を下げ、告白の返事を待つた。

その気持ちが、俺には痛い程理解できる。この瞬間を邪魔する事など、俺には到底出来なかつた。

俺はただ、黙つて答えを待つ。すると少しして、栗藤が何か声を掛けると男は頭を上げた。

俺は少しだけ近づき、耳を傾ける。

「本当にありがとう。びっくりしたけど嬉しいよ」嫌な予感が、まるで心臓を握り締める。胸が苦しくなり、呼吸がし辛い。

栗藤は、口を開いた。

「でも……」めんね。私今、好きな人いるんだ……！」

「

それ以降の会話は、頭には入つてこない。ただただ、今の一言だけが頭の中で何度も繰り返される。

告白を断られた男は、一、二度頭を下げてから走つて離れ、俺とすれ違つた。

そして俺は、正面から栗藤と向き合つた。

最終話「楳原太陽と栗藤つむぎ」

「…………栗藤」

「ま、楳原くん……」

今会話を俺に聞かれてしまったと思ったのか、栗藤は頬を赤らめた。

「栗藤…………」

俺は一步、二歩と歩み寄り、栗藤の手をとった。

「ずっと……ずっと、初めて会った時から…………」

両手が震えているのが、自分でも分かる。

「一年半……。栗藤が森川と付き合つてた時も、俺の事なんか全く知らなかつた時から…………」

計りずも、目元から零れ落ちる涙。俺はそれを拭う事なく、握つた両手に力を込めた。

「ずっと……ずっと、栗藤さんの事が好きでした…………」

「そしてこれからも……ずっと、いつまでも……。栗藤さんの事だけを好きでいます…………」

「言つた。言つてしまつた。

遂に…………俺は一年半分、彼女への全ての想いを言葉に乗せて言い放つた。

そして…………。

栗藤の目からも溢れ出す、大粒の涙。

彼女はその泣き顔を隠すかの様に、俺の胸元に飛び込んだ。

「…………！」

笑つてこのか泣いているのか、どちらともおぼつかない泣き声。

俺は肩口から両手を回し、力の限り抱きしめた。

＊＊＊

そして、一年後。
俺は相変わらず、朝のバスの最後列で漫画雑誌を読んでいる。
両耳のイヤホンは、もう俺には必要無い。携帯音楽プレイヤーご
と、机の上に置きつ放しだ。

『 停留所 』

次第にスピードを緩め、いつもの停留所でバスは止まった。
扉が開き、人が乗り込んでくる。

俺は、漫画雑誌を閉じ、鞄の上へと投げ捨てた。

風になびく、艶やかな黒髪。豊潤な唇に細い脚。

「太陽！」

彼女は満面の笑みをこちらに向け、俺も名前を呼び返した。

白く澄んだ肌の上に乗った整えられた顔のパーツは、道
行く人の目を惹きとめる。

バスに乗っている男性は一人の例外無く彼女を振り返り、女性は
その美貌を羨んだ。

彼女は真っ直ぐ俺の元へと歩いてくると、周囲の目など気にする

事なく隣に座った。

「おはよー。」

「おはよう。テスト勉強した?」

「バッヂリ! 今日は負けないよー!」

「本当? ジャア、負けたら一週間昼飯オゴリね」

「え……、それはちょっと……」

「バッヂリじゃないの?」

「バッヂリだけど……」

思わず、笑みが零れる。つむぎもまた、つられた様に笑った。

「……なあ、つむぎ…………」

「何?」

ふと、言いたくなつた。

「好きだよ。一生」

つむぎは氣恥ずかしそうに困つた様な顔をして、そして、笑つた。

「私も!」

漏れ出す笑みは、どこから来るものか分からぬ。
俺は座席の上で、つむぎの手を握つた。

いつものバスの、いつもの席。

並んだ背中は、こつまでも幸せなうで

。

あとがき

是非。是非また、次回作でお会いしましょう。

本当にありがとうございました。

＊＊＊

【以下、どうでもいい裏話や雑談等。】

『使い切れなかつた展開、伏線』

何とか、連載当初から思い描いていたラストに辿り着く事が出来ました。

とは言え本当は、盛り込みみたい展開やネタがまだまだ残っていたのですが、諸々の事情が重なりこの形となりました。

当初の予定では、完結話の直前に高嶺さんが槇原に告白してまたそこで一悶着入る予定でしたしね。というか、本当に直前の直前、正に19話とか18話を執筆している最中まで、その展開は使うつもりでした。

ですが私の計画性の無さ故、流石に高嶺さんが軽い気持ちで入つて来れる雰囲気では無くなつてしまつたので、涙ながらにカットしてしまいました。無念です。

他にも……麻柄のエピソードやクリスマス編、挙句の果てには槇原とつむぎが付き合つてからの話も描くという説が私の頭の中でありましたが、やめました。

なんとなくこの物語は、一人の恋が成就した時点で“完成”したと思つたので。

あとにかく、そんなこんなで“Please · please · please · please come back!”はひとまずこの形で完結致します。

私としても本当に氣に入っている作品ですので、今後も何かしらのエピソードを描きたいと考えたりもしますが、果たしてどうなるかは分かりません。

『閲覧者数』

作者ページを色々と漁ると、作品の閲覧数をチェックする事が出来ます。

そこでこの作品のそれを見ると、大体一日100人ぐらいの人が見てくれている事が分かります。

これはもう、本当に嬉しそうな事です！！

そりやあ、もっともっと、何十倍、もしかしたら百倍以上ものアクセス稼いでいる方はいらっしゃると思います。

でもそれでも、この数字は私にとってどう感謝すれば良いのか分からぬくらい巨大なものですね。

だって、これだけ何万、何十万という小説がある中で、私の小説を選んで読みに来てくれる方なんて、本来5人もいれば良いほう。

それが、その20倍以上の人々に日々見に来て頂いている。

感涙の極みです。

こんなダメ人間に多大な期待をかけて下さった方々に報いる為にも、次回作ではより良いものを届けられる様、精進致します。

2008-12-7-01-33

番外編「渚にまつわるHトセトヲ」

槙原太陽は、一抹の不安を胸に秘めていた。異性との交際中に誰もが抱く、相手が他の相手へ心変わりしてしまったのでは無いかという、恋愛の根本にして最大の苦悩。

（ましてや、相手は学校一の美人だからな……）

バスの後部座席に座った槙原は溜息をつき、漫画雑誌のページを捲つた。

それから間もなくして、バスはいつもの停留所へ着いた。

「おはよっ！」

栗藤つむぎは満面の笑みを浮かべて槙原の横に腰を降ろしたが、挨拶を返す槙原の顔はどこか浮かないものだった。

「どうしたの？」

つむぎは槙原の顔を覗き込む。

「いや、別に。大丈夫」

槙原は少し顔を引きつらせながら、笑顔を返した。

「…………、そう？」

（……学校に着いたら、またあいつに相談してみるか……）

槙原はつむぎの話を半分に聞きながら、そんな事を考えていた。

槙原は言葉を詰まらせる。

「？ 栗藤が心変わり？」

葉山はストローを咥えながら田を丸くした。

「いや、実際にそういう事があつた訳じゃなくて、何て言つか、心変わりしちゃわないかなーて……」

槙原は言葉を詰まらせる。

「なんだ、ただの不安かよ。てっきり栗藤が浮気でもしたのかと」

葉山はバカバカしそうに笑う。

「おい、真剣な話なんだぞ！……」

槙原は葉山の口元から紙パックのジュースを取り上げた。

「杞憂だと思うけどねー」

「……かもしなねーけど、何か不安なんだよ。どうにかなんねーのか?」

「俺はドラえもんじゅわーーつの」

葉山は紙パックを取り返した。

「ま、学校一の美人と美人と付き合つてりゃ敵も多いし、気持ちは分からぬでもねーけど……、あ」

葉山は何かを思い出した様に言葉を途切つた。

「そんなに不安なら、試してみるか

「なつ……、何を」

「栗藤の気持ちがあ前から本当に逸れてんのがどうかわ」

葉山は一コリと笑みを浮かべる。

「ど、どつやつてー?」

「俺も、昔ちよつと聞いた事があるだけの話なんだけど。ただ彼女に『彼氏が浮氣しますよ』みたいな事を言つだけなんだよ」

「……それだけ?」

槙原は懷疑心を露にした。

「栗藤が本当に心変わりしていればラッキー——となつて嬉々としてお前を振るだらうし、お前の事を好きなまゝなら悲しむだらう。その反応で判断するのさ。簡単だろ?」

葉山は自身気にそう言つた。

「ええー……、それ怖すぎるだろ。もし心変わりしてたら……」

槙原は顔を青くする。

「確かめねーと気が済まないんだる? 安心しろ、俺がその役は引き受けけるから」

葉山はそう言つて槙原の頭をポンと叩くと、紙パックをミニ箱へと捨て教室を出た。

「…………」

槙原は、不安そうにその後姿を眺めていた。

昼休み、葉山は一旦槙原の教室を訪れた。

「オイ、これから栗藤んとこ行ってくるからな

「おつ……おい、本当に行くのか！？」

槙原は葉山の袖を掴んだ。

「ああ、不安な気持ちのまま付き合つてちやにけねーんだぞ。いつ
いうのはハツキリさせねーと。お前も付いてくるか？」

「まさか！ い、行くわけねーだろバカ！！」

「ま、そうちうな。んじやちょっと待つてる。なるべく早く戻つ

てくれるから

「あつ、ちよ……」

槙原の制止を振り切り、葉山は廊下へと駆け出した。

(……マ、マジで……)

槙原の顔からは血の気が引き、落ち着かない様子で足をガタガタ
と震わせる。

「栗藤！」

階段の下で葉山は栗藤を呼び止めた。長い髪をなびかせて、栗藤
は後ろを振り返る。

「どうしたの？ 葉山くん

「ちょっと良いかな？ 話があるんだけど」

「？」

つむぎは少し困った顔をしたが、とりあえず千尋を先に教室へと
返した。

「どうしたの？」

廊下の端で、つむぎと葉山は向き合つて言葉を交わす。

「いや、ちょっと小耳に挟んだ話なんだけどさ、なんかこの前、槙
原のヤツが女と街を歩いてたって噂が……」

「？」

つむぎは頭を丸くした。

「いや……あくまで噂なんだけど、槙原が浮氣してゐかもしない
つ一つ話が……」

葉山は冷や汗を流しながらそつと続けた。するとなつむきは話を理解
し、少し顔を俯かせて黙り込んだ。

「葉山くん……」

眩ぐつむきの、田元は髪に隠れて見えない。

「……な、何?」

つむきは、ゆっくりと顔を上げた。

「嘘つめー。」

つむきは、満面の笑みではつまつとやつて放った。

「えつ……ー?」

葉山は驚き、呆然として聞き返す。

「もう、どうしてそんな嘘つくな。まだエイプリルフールじゃな
いよ?」

つむきは可愛らしく頬を膨らませ、葉山の胸をポンと叩いた。

「…………！」

何か信じられないものを見る様な田元は、叩かれた位置を自
分の手で摩る。その時予鈴が廊下に鳴り響き、つむきはハッと時計
を見た。

「やっぱー。早く戻らないとー。」

つむきの体は軽やかに、教室に向かつて駆け出す。
「ちよー、ちよーと待つてー!」

葉山は思わず呼び止めた。

「ふ、不安じやないの?」

するとつむきは振り返り、再び笑顔を葉山に向けた。

「全然ー。」

「…………」

そしてつむぎは階段を駆け上がる。葉山は今度はそれを止めなかつた。

「…………つたく、杞憂にも程がある。どんなだけ信じ合つてんだつづーの」

そう言つて、葉山は馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに舌打ちをした。

「お、おい、どうだつた！？」

楳原は階段の上から顔を出し、恐る恐る尋ねた。

「…………ばーか、下らねえ心配してないで教室戻れ」

葉山はそう言つて楳原の肩に腕を回し、二人は階段を上つていつた。

番外編「渚こまつわのHTセトナ」（後書き）

久しぶりでしたが楽しく書かせていただきました。これからも時々
書けたら良いな。

第2部序章「少年少女達」

2008年 10月3日 横原太陽と栗藤つむぎが交際を開始する。土愛直哉、失恋

10月4日 森川大和が一人の交際を知るが、特に興味を示さない
10月5日 高嶺美華が一人の交際を知る。高嶺美華は栗藤つむぎに對しての敵愾心を一層強くした。高嶺美華が同級生の佐々木慶太と交際を開始する

10月6日 麻柄杏輔が一人の交際を知る。麻柄杏輔、失恋

12月15日 麻柄杏輔が同級生の中島礼子と交際を開始する

12月25日 横原太陽と栗藤つむぎは一人でイルミネーションを見に出掛けた

麻柄杏輔が中島礼子への興味を失う。破局

12月31日 麻柄杏輔、P A F F Yの年越しライブを観る為に一人で上京

2009年 1月1日 横原太陽と栗藤つむぎは一人で初詣に出掛けた。二人でいつまでも仲良くやつていけるようになると願う

森川大和は仲の良い友人らと初詣に出掛けた。内訳は男性二名、女性四名

麻柄杏輔、北海道に帰つてくる

2月7日 栗藤つむぎ、チョコレート作りの準備を始める

2月13日 高嶺美華はデパートへと足を運び、佐々木慶太用の他大量の義理チョコを買い込む

2月14日 栗藤つむぎと高嶺美華、チョコレートを渡す

森川大和、高嶺美華の他数名の女子からチョコレートを受け取る。肩書きは義理

麻柄杏輔、同級生の小玉由希子から本命のチョコレートをもらつ。麻柄杏輔が小玉由希子と交際を開始する

3月14日 横原太陽、チョコレートのお礼のクッキーを栗藤つ

むぎに手渡す

森川大和はチョコレートをくれた数人の女子の内、高嶺美華と黒木栄にのみお礼を渡した

麻柄杏輔はホワイトデーの存在を忘れ、これを契機として破局
佐々木慶太はチョコレートのお礼のクッキーを高嶺美華に手渡した
3月27日 高嶺美華、佐々木慶太の携帯にメールを一通入れ、
破局

高嶺美華、同級生の上野亮太と交際を開始する

4月1日 横原太陽、栗藤つむぎ、森川大和、高嶺美華、麻柄杏
輔らは第三学年へと進級。土愛直哉は第二学年へと進級

5月9日 栗藤つむぎの体重が落ち始めている事に森川大和が気
付く

8月7日 杉山紀之、高嶺美華に交際を申し込むが振られる

9月29日 栗藤つむぎがほぼ以前の体重に戻る。森川大和は激
昂したが、その感情を吐き出す事が出来ずにはストレスとして溜め込
んだ

10月3日 横原太陽と栗藤つむぎ、交際一周年

12月25日 横原太陽と栗藤つむぎ、受験勉強の合間にイルミ
ネーションを見に出掛ける

高嶺美華は上野亮太にどこか遊びに行こうと申し込んだが受験勉
強を理由に断られ、これを理由に険悪になる

2010年1月1日 センター試験間近。横原太陽と栗藤つむぎ
は近所の神社にて健闘を誓つた

3月27日 高嶺美華と上野亮太、交際一周年

そして、4月1日

横原太陽、栗藤つむぎらは希望の大学へと進学した。

太陽は理系の大学に、つむぎは文系の大学に。二人は別々の大学
で、新たな道を歩み始めた。

その道がどんなものであるか、それはまだ誰も知らない。

第一話「大和は美人と寄り添いたい」

とても不遜な言い回しをすると、森川大和は、自分以上に顔の良い同性と出会った事が無い。それを誰かに話す訳でも無いのだから、きっとそれは真実だ。

森川大和は比較する。

大和は、同性を見かけると必ず自分の顔と比較する。それは、生まれつき顔の整っていた彼の習慣のようなものであり、十歳の頃にその癖が出来て以来、ほぼ欠かした事は無い。とは言え、比べるとは言つても上記の有様なので、「どちらが格好良いか」では無く「自分が相手よりどれぐらい格好良いか」を量るだけとなつていて。ちなみに、麻柄杏輔がマイナス2、土愛直哉がマイナス5、槙原太陽でマイナス4である。特に数値に意味は無いが、より分かりやすく比較する為のもので、マイナス側であるという事はそれだけ大和より顔が良くないという事である。下限はマイナス10であり、当然、プラス側に出会った事は未だ無い。

森川大和は好きなものしか受け入れない。

大和は、その時彼女がいないからといって麻柄のように誰とでも付き合つたりはしない。いや、この言い方には語弊があり、どちらかと言えば麻柄の考え方人がとズレすぎている訳なのだが、それでも大和も女性に対してこだわりすぎる。事実、これだけの容姿をして高校三年間で彼女ができたのは一度だけであり、彼女がいい時期に受けた告白は全て断つた。その中には北本由美や三好美保といった一般に可愛いとされてきた女性も含まれていたが、彼女達では大和の好意を寄せさせる事は出来ず、呆気なく振られてしまつた。

大和が付き合つても良い最低線となるとそれは高嶺美華や黒木栄であり、最低線でない女性とは栗藤つむぎただ一人である。

森川大和は遠慮をしない。

大和は、自分は異性から愛される容姿をしていると客観的に理解している。だからこそ女性に対しての遠慮を知らないし、何よりも優先されるのは大和自身の意思である。

付き合っている彼女が不細工になれば躊躇う事なく振ってしまうし、それがまた元に戻れば、何も無かつたかのように、再び付き合つ事を望むだろう。

大和は、何があつても栗藤つむぎを諦めない。

何があつうと、どんな邪魔者が現れようと。栗藤つむぎが美しくあり続ける限り、大和は死ぬまで追求するだろう。

第一話「上の上には上がじる」

とある屋下がり、大学構内の木の下のベンチ。

(……槙原太陽がつむぎと付き合つたのは、『確信』があつたからだ)

大和は、一人について思いを馳せていた。

(いつか、つむぎは元に戻る。きっと元の体重まで瘦せる……その『確信』があつたからこそ、槙原はあんな不細工と付き合つ事を決心した)

誰かと付き合つという事は、何らかの見返りを求めるという事。それは金であつたり、優越感であつたり、好きな人と共にいたいとうただ純粋な願いであつたり。当時のつむぎにはそれが無い。

(あの時期のつむぎと付き合つからには、『予め元に戻る事を知っていた』……。それしか考えられない。それならば、元に戻るまでは多少目を瞑つて付き合つのも我慢出来ない事では無い)

大和は、その考え方こそが正しいと信じて疑わなかつた。太陽が当時のつむぎと付き合つたのは、先々の見返りを求めていたからだと。大和は、つむぎと付き合いたい。太陽をしつかりと拒絶した上で、自分の元に戻つてきて欲しい。

(槙原太陽があまりにも邪魔すぎる。奴さえいなければ全ては丸く収まると言うのに)

大和は心中蔑んだ。

(しかし、不細工だつた時期の自分を選んでくれた槙原の事をつむぎは信用し切つていいだろう。それはあまりに厄介すぎる……そもそも、『この俺の元に戻つてこよう』としない時点で、つむぎは他の男には目もくれないだろう）

空気が張り詰め、春先の優しい風が止んだ様な気がした。

(だが……『槙原が他の女の事を好きになる事はあり得る』。非常に低い可能性だが、それは常にあり得る。奴らが別れるとすれば、

それしか無い……喧嘩別れを待つてゐるつもりなど毛頭無い（）

大和は、つむぎが好きで仕方が無い。好きで好きで、今も、それが目的で同じ大学に入学した程に。

その為ならば何でもする。大和の中には歪んだ決意があった。（それには、魅力的な女が必要だ……つむぎ以下ではあるが、とにかく槙原の好みを捉えていればそれで良い）

大和は立ち上がり、メインストリートを歩き出した。

（高校の同級生なら、高嶺美華や黒木栞……高嶺の奴は槙原の好みという感じでは無いな。しかし、黒木……奴ならあるいは）

吹き出した春風がなびかせる、おそらくは地毛であろう優しい茶髪。

（黒木の連絡先は当然残してあるし、彼氏もいないはず……槙原さえ奴の趣味に合えば、俺が何とか……）

地毛だらうと思わせるのは、その顔はあまりにも日本人離れしているから。小柄に良く似合つショートボブ、それは一歩一歩足を動かす度に小刻みに弾み、これでもかと言わんばかりに春の空気に馴染んでいる。

その女は大和の逆方向から歩いてきて、二人は必然にすれ違う。

（！？）

反射的に、大和は女の後姿を振り返ってしまった。

その容姿たるや、肩を並べる者などたとえ芸能界を探したつて見つかるだろうか。

（バカな……）

大和は呆然と、女の後ろ姿を睨んでいる。

女はあまりにも美しく、異常な程に愛らしく、思わず大和はその肩を掴んだ。

第三話「芸術品」

大和は、自分の衝動的な行動と現状を把握し、以降の応対を瞬間に組み立てた。

「な、なんですか！？」

いきなり肩を掴まれたその女は、当然驚いた様に振り返る。その表情には怯えと戸惑いとが含まれ、強張る両目はしつかりと大和を捉えている。

「あっ、ああ……」「めん、いきなり」

大和は我に返ったような素振りで右手を女の肩から離した。

「いや、覚えてない？ 森川」

そう言つて、大和は自分の顔を指差した。その表情は優しく、語りかけるかのように微笑んでいる。

「森川……？」

当然、それ程の美人ならば大和の記憶に残っていない筈が無い。これは大和の常套句。

「んー、忘れちゃつた？ 小学校の時同じクラスだつたじやん。森川大和」

忘れられてしまつて少し恥ずかしいような、そんな柔らかい笑みを浮かべる。

そんな大和の受け答えで緊張が和らいだように、女も強張った頬を緩ませた。

「え……」「ごめん。ちょっと忘れしゃつたかも……。やばい、ほんとごめん」

女は申し訳無さそうに顔を俯かせる。見上げる様に大和を見るその目は、丸々として愛らしい。

(……思い切り外人つて顔じゃないが、純日本人でも無いな……。
日本とアメリカあたりとのハーフか)

大和は品を定めるように女の顔を観察する。

白く透き通つた肌。異様な存在感を持つ瞳。これでもかと言わんばかりに整つた顔立ち。

(……)

「うー、忘れられちゃつてたかあ
オーマイガッド。そんなセリフでも出てきそうな陽気なリアクションで、大和は右手で顔を覆つた。

「まあ、会うのは小学生の時以来だもんない。えっと、下の名前は里香で合つてるよね？」

それは、大和が即興で考えた架空の人物。その言葉で、女は意外そうに顔を上げた。

「ち、違います……けど……」

「えっ、里香じゃないの！？」

大和は驚いたように声を張り上げた。

「マジ？ ジヤ、ジヤあ人違い……なのかな？」

やつてしまつたという表情で、大和は後ずさりした。女も少し苦笑している。

「……た、多分」

一拍置いて、二人は笑い合つた。

「私、その里香って人とそんなんに似てるんですか？」

とても明るい表情で女は笑う。先程の緊張した表情と比べ、女は一層可愛くなつた。

「うん！ もう、赤の他人なんだつたらほんとあり得ないぐらいのそつくりさんだよ。……あ、もしかして里香のお姉さんだとか……ひょつとして川内つて名字？」

「違いますよ」女は楽しそうに笑う。「私、小岸マキシって言います。カナダと日本のハーフで、こんな変わった名前ですけど（カナダか……。……それにしても、つむぎ以外にこんな奴が……）

「なんだ、全然違つた」

大和も柔らかい笑顔を作つた。

「えっと……小岸さんはここ的学生？」

マキシで良いですよ。そう言おうとしたが、初対面の異性相手にそんな事を言うのも恥ずかしいのでマキシはやめた。

「はー」

マキシは「くつと頷いた。

「じゃあ、これからまた何かの縁で会つ事もあるかもしれないね。俺は経済学部だから、何かあればよろしく」

そうして大和は手を振って、次の講義へと向かっていった。

「こちらこそよろしくお願ひします」

マキシは、その背中に向かって手を振り返した。

第四話「邂逅へのカウントダウン」

『退屈』とは、誰にでも起つて日常的な病である。ただただ無為に流れ行く、怠惰な時間。人々はそれを埋める為にこそ、こつして様々な娯楽を求めている。

高嶺美華は、『退屈』を何よりも忌み嫌う。

阿呆の様に過ぎてゆく、無意味な時間が憎らしい。常に刺激が欲しい。面白くなれば目覚めている意味が無い。

美華は、時々『もし自分が美人じゃなかつたら』と思う事がある。そして、その度に背筋の凍る思いをするのである。異性から相手にされず、愛されず、羨望の目になど縁が無い。そんな日々を思い描くだけで、美しく生まれてきて本当に良かつたと美華は胸を撫で下ろすのだった。

その美しさゆえ、幸いにも美華は幼い頃から刺激には事欠かなかつた。異性からの告白は何度味わつても気分が良く、その度に美華の心は弾む。高校二年の時麻柄杏輔に振られるまで、一瞬たりとも彼氏のいない時期というものは無かつたし、無論今もその例には漏れない。

結局のところ、彼女にとつて恋愛とはただの手段でしかないのだ。暇を潰し、楽しさを得る為の娯楽。人が、より良い車、より質の高い映画を求める様に、相手の男性の容姿はより良い程に良いに決まつていてる。

だから、美華は交際相手に対して欠片程の思い入れも無い。より良い男が見つかればほんの少しの躊躇も無く鞍替えするし、彼氏がいたつて他の男とも遊ぶ。だが、美華はそれらを『悪い事』だとは捉えていない。本当にそれが嫌なら、誰も自分と付き合わなければ良い。高嶺美華は最悪の女だと、誰も見向きもしなければ良い。

結局、周囲の異性にそれは出来ないと美華は理解している。いくら強がりを言おうと、美華が少し声を掛けるだけであつといふ

間に態度を変える。ならば、美華がしている事は『悪い事』では無い。それを上回る容姿を持つた自分の、当然の権利なのである。美華はそれを理解していた。

「ねえねえ。知ってる？」

友人、木元真子は美華の肩を叩いた。先の話を述べた直後だと、まともな友人がいる事自体違和感を感じてしまいそうだが、美華はあくまで外面は良いので、友人は普通にいる。もっとも、逆に友人と言つても上つ面の付き合いが多く、本当に美華を友人だと思つてるのは真子をそれとしても決して多くは無かつたが。

「何が？」

興味は薄かつたが、一応社交辞令として聞き返した。

「北大に私達と同じ代のアイドルが通つてるらしいよ

「アイドル？」

氣だるそうだった美華の顔が、僅かに冴える。

「うん。私も又聞きの又聞きで、全然詳しくは無いんだけど。もうかなり人気ある人らしいよ」

「何て人？」

「いや、それが名前すら……」

真子は残念そうに首を振つた。美華はそれくらいさつさと調べておけよと思ったが、まあそれは良い。

(……北大か。確か大和が……)

事の詳細を聞くついでに、大和と話が弾むかもしれない。

「分かった。じゃあちよつと北大に通つてゐる人に聞いてみる」

そう言つて、美華はポケットから携帯を取り出した。

第四話「邂逅へのカウントダウン」（後書き）

「このところのアクセス解析が変になってしまったみたいで、7月1日以降更新されていない。

果然と感想をもらえるような格の高い作家さんと違つて、アクセス数が唯一の指標＆モチベーション維持だった私にとってはかなりのショックキングな出来事。

一日も早い復興を願います。管理者さん、大変でしょうけど頑張つて下さい。

第五話「両手に華を抱えたい」

高嶺美華から森川大和へ。電子の世界を飛びメールが届く。

『北大にアイドルが通つてるって聞いたんだけど、大和くん知ってる？？』

大和はそのメールを見て、即座に一人の人物を思い浮かべた。

(小岸マキシ……。道理で……)

当然、北大に通う美女という点では栗藤つむぎもその対象であつたが、つむぎがアイドルなどやるような人間でない事を大和は知つている。そもそも、つむぎの事なのだつたら美華の耳にも詳細が入るだろう。大和はそう考えた。

『マジ！？ 学部とか特徴とか、何か分かる？』

大和のメールに対し、返事はすぐに返つて来た。

『ごめん、何も分かんないんだよね（涙を流す絵文字）。でも、かなり人気のあるアイドルらしいんだけど……』

(…………？)

大和は不思議に思つた。これまで小岸マキシをテレビで見た事は無い。言う程に人気があるなら、一度くらい見た事があつても良さそうだが……。だが、そもそも最近は新生活の準備、その前は受験勉強一色と、よくよく考えればゆつくりテレビを見た記憶などあまり残つていらない。ならば、小岸マキシをテレビで見た記憶が無くても、まあそれはそういうものなのだろうかとも大和は思つた。何より、マキシの圧倒的な魅力こそがこの推測の最大の根拠でもある。

『そつか。じゃあ友達とかに聞いてみる。何か分かつたらまた教えて（手を振る絵文字）』

これくらい調べてからメールしてこいよと大和は思つたが、まあそれは良い。詳細をマキシに聞いてみる際、会話が弾むかもしれない。

(小岸マキシ……アイドルか。これはつむぎにも無い付加価値だ……)

…）

アイドルの彼氏といつのは、一体どれほどの優越感を得られるのだろう。それを考えるだけで心が弾む。

（くそ、メールアドレスくらい聞いておくべきだつたか……）

少しでも早く、マキシと言葉を交わしたい。マキシと関わりたい。大和の欲求はとても素直だ。

栗藤つむぎに小岸マキシ。一生の中に一度出逢えるか出逢えないかという美女が、この大学には二人もいる。

（特に、槇原太陽はこの大学じゃないというのが素晴らしい。それが何よりも心地良い）

大学生活はとても楽しいものになりそuddo、大和は輝ける未来に思いを馳せた。

第六話「Maximum」

翌日、北海道大学のキャンパス。大和は、同じ講義を受ける予定の男友達と肩を並べて歩いていた。

（早く小岸に会いたい。早く会って、事の真偽を本人から確認したい。顔が見たい）

栗藤つむぎに肩を並べる美貌、アイドルという肩書き。小岸マキシは大和の心を掴んで離さなかつた。

大和は、基本的に女と肩を並べたい。だから今の状況は別に望んでのものでは無かつたし、もつと言えば美人をたくさん見かけたい。キャンバスの中を歩いている時や街に繰り出した時、すれ違う人間は女性ばかりだととても嬉しい。

大和はそれら女性の容姿を欠かさずチェックし、もしどても魅力的であれば声も掛ける。それは神経質すぎる程であるが、それ故にすれ違う同性には微塵も興味を示さない。ほとんどの場合。

「うつわ、今の人めっちゃ綺麗だつたなー」

大和の前方から歩いてきた男が、後ろを振り返つて言つた。もう一人の男も興奮気味に意見を肯定する。

不思議と、大和は確信していた。目を細め、視力を凝らす。

視線の先には女性が一人。栗毛は今日も透き通つていて、春の日差しに非常に映える。

「 小岸さん」

大和は、小さく微笑んで彼女の名を呼んだ。

第六話「Maximum」

「あ、森川くん。こんにちは」

「マキシは会釈した。

「どうも。これから講義？」

「そう言つと、マキシの返答を聞きながら大和は「悪い、先行つて」と隣の友人に囁いた。

「俺もこれからなんだ。まだ大学の講義にはあまり慣れなくて、毎日大変だよ」

大和はそう言つと笑顔を作つた。

「私もです。高校とは全然違いますね、やつぱり。無理してこんな難しい大学入らなきや良かつたかなー、なんて」

マキシは冗談半分といつた顔でそう返した。

「はは、俺も。ギリギリで滑り込んだようなもんだから」

言い切つて大和は、「しまつた。ここで『やつぱり忙しいよね。

聞いたよ？ アイドルやつてるとかつて』と言えば良かつた」と思つた。

（自分の事なんか話してゐる場合じゃない。早くしないと講義の時間になつてしまつ）

マキシの言葉を待たずに、大和はそのまま続けた。

「でも多分、小岸さんは俺の何百倍も忙しいんだろうな。えつと、聞いた話じゃアイドルやつてるとかつて……」

それにもしても、見れば見る程にマキシは美しかつた。大和は一秒を重ねる度にマキシに惹かれていく、遠慮する事もなくマキシの目を正面から見つめてしまつていた。

「うーん、いや、アイドルっていうか雑誌モデルですけどね。デビューしたばかりですし、たまーに雑誌に出るくらいで忙しいとかは全然無いですよ」

YESともNOともれない答えに、大和は一瞬対応の仕方を見失つた。

いや、頭の中では「小岸マキシ＝アイドル」の図式が完全に出来上がつてしまつていただけに、その衝撃は想定外に大きなものだつた。

(小岸マキシはアイドルじゃない……？)

北海道大学に通う、少なくとも既にある程度の人気を誇っている
箸のアイドル。

(雑誌モデルといつ肩書きがどこかでアイドルという表現に捻じ曲
がつてしまっていたのだとしても、マキシはまだデビューしたばかり
だと言ひ。少なくとも、この噂はマキシの事では無い)

心の奥底から、言い様の無いざわめきが突き上がってくる。

(この学校にはもう一人、とんでもない奴がいる)

鳴り響く機械音。

アラームを止めてからカップラーメンの蓋を剥がす。液体スープ、
粉末スープを入れ、箸でかき混ぜる。

すると次にやかんのお湯を粉末スープの袋へと注ぎ、軽く揺らし
てから今度はカップラーメンの容器へと移した。それと同じ事を液
体スープの袋でも行う。お湯の量は、これで丁度良くなるように初
めから計算されている。

こうする事で粉末、液体スープ共に0・1%の成分も残さず容器
へと移そうと言っている。

「

これをしないと気が済まない。ここまでしないとキレイで容器」と
排水溝へとぶちまける。

白く、形の整った綺麗な脚。肩ほどまで伸びる澄んだ茶髪。
手の込んだ眉、透き通った肌、細い手首、華奢な首、etc、etc
……。

それはまるで、女性のよひ。

姫島 彩乃18歳。
所属：ジャニーズ事務所。

第七話「つるわしき頂点」

大和は、学生食堂でノートパソコンを起動させた。検索ページへと移動し、検索ワードをタイプする。

『北海道大学 アイドル』

マキシから話を聞こうと思っていた大和だが、最早そういう事態ではなくなってしまった。手段を問わず、早く真相を知りたい。大和は、検索ボタンをクリックした。

『姫島彩乃、北海道の大学へと進学』

『イケメン王子姫島、北海道へ』

『ジャニーズ姫島活動休止？ 北海道大学へ進学』

ズラッと並ぶ検索結果。それを見て大和は驚愕した。

姫島彩乃の名は大和も当然のように知っている。むしろ、大和達の世代で姫島の名を知らない人間がどれほどいると言うのだろうか。（姫島……彩乃。まさかこんな超有名人が……）

女だと思っていたとか、そういう事はもうどうでも良くなっていた。姫島彩乃が自分と同じ大学に通っている。その衝撃は計り知れない。

無数に並ぶ検索結果の中から、姫島彩乃の紹介ページが目についた。大和は何となくそれをクリックする。

『嬉しいな、僕のファン？』

突然背中側から声がした。大和ははっとして、反射的に後ろを振り返る。

『男の人で僕のファンって結構珍しいんだけど、ありがとう』

全体的に華奢な体、女のように整った顔立ち、肩ほどまでに伸び

た茶髪。目元のサングラスを外されなくとも、傍にいる大和にはそのオーラが感じ取れた。

(ひ、姫島……彩乃……)

パソコンを覗き込むようにして、大和の肩に手を掛けた彩乃。大和は、瞬間その姿に見惚れてしまっていた自分に気が付いた。

「こ、こんにちは」

切り出したのは大和。

「まさか、あの姫島彩乃が北大に入学していたなんて……今日になつて初めて知りました」

大和が緊張しがちにそう言い終えると、途端に彩乃是腹立たしいといった面立ちに変わり、大和の肩から手を離した。

「事務所の連中に拘束されてたんだ。スケジュールをギチギチに詰められ、こっちに帰つてくる暇など無い程に」

バン！ 彩乃是食堂のテーブルを叩きつけた。

「奴らは鬼だ……所属タレントの事など家畜程度にしか考えてない。一円でも多く稼ぐ為に朝から晩まで馬車馬の様に働かれる」

大和は、なんだか肩すかしを喰らつたような気分だった。

「クソ。たまたま事務所に入つたつてだけで奴らめ、完全にこの俺を我が物の様に扱いやがる。そもそもと言うのも俺がジャニーズ事務所なんかに入つたのは」

これから話がまだまだ続きそうなところで、彩乃の携帯が鳴り出した。

彩乃是恐る恐る着信先を確認すると、あからさまに落胆した。

「マネージャーだ……。クソ、なんだってんだ。極力電話してくれなと言つてあるのに」

彩乃是憎たらしそうに携帯を睨む。

「じゃあ、そういう事だ。また何かあればよろしく願うよ

彩乃是そう言つて手を振り、食堂を出て行つた。

一人残された大和はただ呆然として、ノートパソコンの電源を落とした。

第八話「姫島彩乃」

「18歳になつた姫島君ですが、何かやりたい事はありますか?」「マイクを持つた女性司会者。

彩乃是特に表情を強張らせるでも無く、優しく微笑むでも無く。淡々と質問に答える。

「やりたい事……と言うよりかは僕の夢ですが」「是非、お聞かせ願えますか?」

司会者は興味津々に顔を輝かせた。

「25歳までにジャニーズを引退する事……それが僕の夢です」街角の大型ビジョンに映る姫島彩乃是、平然とそう言つてのけた。

「彩乃君!!」

テレビ番組の撮影終了後、マネージャーは彩乃の楽屋の扉を荒々しく叩いた。

「なんですか?」

彩乃是、個別に呼びつけたマッサージ師のマッサージを受けてい

る所だった。横になつたまま、顔をマネージャーへと向ける。

「なんだじやないよ! さつきのインタビュー、もう日本中で大騒ぎになつてるぞ!??」

事務所トップクラスのタレントである姫島彩乃。あんな発言をすれば、ある程度騒ぎになるのは目に見えていた。

「知りません。僕は聞かれたから答えたまで……。文句ならあの不細工なインタビューに言つて下さい」

「おい、そういう事言つのもやめろって言つてあるだろ? 一般人に聞かれたらスキヤンダルになる……って、俺が言いたいのはそんな事じゃなくて、何だよ、25歳で引退するって!?!」

マネージャーのまったく纏まらない話を片耳に聞きながら、彩乃

は不快感を露にしていた。ビルやビルの騒音でマネージャーは相当大変な思いをしているらしい。

「どうもこうも……話してなかつたですか？　僕は25歳までには事務所を引退します」

彩乃是優しい笑顔でそう語る。

「引退つて……どうしてだよ！　タレント業が辛いか！？」

「まあ、それもありますけど」

マッサージがとても気持ち良いようで、彩乃是大きな欠伸を吐き出した。

「冗談やめてくれ！　今だつて何とか頑張てるじゃないか！　大学も卒業して、仕事に専念できるようになればきっと楽しくなる！」「今は無理矢理体に鞭打つてるだけです。これをこの先何十年と続けるなんて……寿命が勿体無いです」

「いや、そもそも僕は大学なんて行かなくても良いって言つたじゃないか。彩乃君なら人気が落ちて仕事が無くなるなんて事は絶対に無いし、学歴なんて付けなくともやっていける筈だ」

そう言つと彩乃是重い体を起こし、マッサージ師に樂屋を出る様指示した。

「…………な、なんだよ」

一人きりになつた樂屋で、マネージャーは少し萎縮した。

「確かに……なりたくてもなれない人間が星の数程いるこの職業。せつかく美しく生まれてきた僕が自ら身を退くのは多少なり申し訳なくも思う。マネージャーの言つ通り、学生時代が終われば少しは負担も減るのかもしね。だがね……」

彩乃が一步、二歩とマネージャーの方へと歩み寄るのに比例して、マネージャーは後方へと下がつてゆく。

「僕はね、美人な人といっぱいエッチな事がしたいんだよ」

一瞬、信じられない程に空気が凍り付いた。

あまりの衝撃に、マネージャーは言葉を失う。

「おつと、君とてこの意思を批難する権利は無い筈だ。男として生まれたからには、異性とそういうコトをしたくなるのがこの世の常」

彩乃是高らかに、まるで選挙演説かの様に持論を語り出した。

「だがどうだ。ジャニーズという悪魔の団体はそれを許さない。ちよつと女と街を歩くだけでやれスキヤンダルだやれ熱愛報道がどちらだの……まるで拷問だ」

そう語る彩乃の目の奥は深く濁つており、憎しみの深さが伺える。「それ以前に、こんな殺人レベルの仕事の忙しさではそもそも機会が得られない！ 一体事務所の基準はどうなつてる…！ ちゃんと労働基準法を守っているのか！？」

「そ、それは彩乃君が北海道の大学に行くからじゃ……」

「やかましい！ 東京は人間の住む所では無い…！ 水の汚さ、人の多さ、人間味の無さ、「キブリ」……こんな所に住めと言つなら俺は自害するぞ…！」

彩乃是激昂した。マネージャーの胸ぐらを掴まんばかりの勢いで叫び散らす。

こんなやりとりが暫く行われた後、彩乃是正気を取り戻したかのようにゆっくりと呼吸を落ち着かせた。

「まあ……という事です。何があるうと僕は25歳までにはジャニーズを引退するし、東京にも住みません。今、なんとか事務所に籍を置いているのは、たくさんエッチな事をするのにお金を貯めているからです。事務所を引退した後、貯金が無くて他の職業に就くのでは意味が無いですからね」

「……本気なのか？」

マネージャーは真剣な目つきで、彩乃の意志を確認するかの様に聞いた。

「本気です。その為に……素晴らしい出逢いを求めて、僕はわざわざ大学に進学したのですから」

彩乃是笑つてそう答えた。

第九話「美は醜を兼ねる」

「やあ森川君。今日も」機嫌麗しゆう?」

東京を脱走し、北海道へ。彩乃の表情はとても晴れやかで、まるで友人かの様に大和の肩を抱き寄せた。

「ひ、姫島……また戻ってきたのか」

朝一番の大学構内。まだ人が少ない事もあってか、彩乃是今日はサングラスはしていない。

「ああ、やはり北海道は良いものだ。毎日でも帰つてきたくなる」そう語る真意は、当然仕事が嫌であるからだが。

「今日、講習は?」

特に話題も無いので、大和は何となく訪ねた。

「確かに、昼頃から一つ入つっていた筈だ」

「昼つて……。じゃあ何でこんな時間から?」

「いや、札幌の朝があまりにも気持ち良いものでね。とりあえず家を飛び出してきたんだ」

彩乃は何故か誇らしげにそう話した。

(ひ、姫島彩乃はバカなのか?)

大和の中には、あつた敵愾心はどこか薄れてしまつており、ただ彩乃という人間に面食らうだけであつた。

「講義までどうすんだよ。俺はもう今これからだけど」

「マジで。講義まで森川君とキヤツチボールでもしていようと思つていたのだが……。なら一回家帰ろうかな」

(こいつは……。素で言つてるんならただのバカだ)

大和は、呆れつゝも彩乃の人間性に少しだけホッとしていた。

「いや、しかしあ折角してきたのに勿体ないからな。女友達でも作つておこうか」

瞬間、弛緩していた空気が凍つた。無論彩乃にそういう意識は無く、あくまでも大和の主觀だが。

「……ナンパでも？」

言いようの無い不安。釘を刺す為に、大和はそう言つたのだった。
だが、彩乃是不敵に笑うと再び大和の肩を抱いた。

「フフ、君も君とてそんなカツコイイ顔をしておいて。僕に紹介する女の一人もいなーいとは言わせんぞ」

「…………！」

大和の背中を冷や汗が走る。

「しょ、紹介？」

「ああ。まあ可愛い子の写真かなんか見せて貰えれば、後は僕が好きにやるから」

大和は、何とか引きつった笑顔を作るので精一杯だつた。
(芸能人の恋愛基準がどれ程のものかは知らないが……きっと、つむぎは彩乃から見ても美人だ。それは絶対に間違いない。そして、姫島彩乃がもしつむぎに興味を持つたなら……)

大和は、腐つても栗藤つむぎの元彼氏。つむぎの趣味嗜好、特に、好きなタレント。諸々知らない筈など無かつた。

(…………！ 姫島彩乃に、つむぎの存在は話せない。少なくとも、俺からは……)

大和は、想像以上に激しくなつた心臓の鼓動を自分で感じていた。
「いや、残念だけど……」

大和は決心し、鞄から財布を取り出した。

「何だい？」

財布の内ポケット……大事そうに納められている三枚の写真。その内、大和は一枚だけを取り出した。

「コレ、俺は可愛いと思うけど。どう？」

大和は写真を彩乃の目の前に差し出した。

「おっ！」

彩乃是興味津々に写真を奪い取り、写真に映つてゐる女性をじっくりと確認した。

……少しして、彩乃是顔を上げる。

「ハレ?」

そう言つ彩乃の目は黒く濁り、不味い物でも口にしたかの様にべ口りと舌を出している。

「やっぱり、そういう反応だよな。どうも俺って他人と異性の趣味がズレてるらしくて。だから残念、姫島に女は紹介できないよ」

「マ、マジで……。君、どこか心身に異常を抱えているのなら僕が話を聞くが……」

彩乃は本気氣味に大和の身体を心配していた。

「結構。正常ですから」

大和はそう言って笑い、『可愛くない時』のつむぎの写真を財布にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1601f/>

Please,please,please come back !

2010年10月8日21時44分発行